



始



396-156



ジブシーイの少女

田内長太郎譯  
東京廣文堂書店發行

大正  
10 7 1  
内交

譯者序

ミグエル・ド・セルヴンテス・サアヴェドラ（一五四七年、西班牙のアルカラ・ド・ヘ  
ナスに生まれ、一六一六年、マドリッドにて死す）の生涯や全著作についての精し  
い紹介は、他に俟つて、ここでは本書におさめた三篇を中心に簡単な序を記してお  
く。

『ジプシイの少女』『コルネリア夫人』『二人乙女』共に皆、一六一三年に出版され  
た彼の短篇集『模範的物語』（或は『教訓的物語』）の中に容められたものである。  
有名な『ドン・キホーテ』の第一編が世に出たのは一六〇五年で、第二編の脱稿、  
即ち全編の完結したのが一六一五年である。その一編の完結に十年の歳月がかつ  
てゐる——それも一六一四年の末頃（丁度第二編の五十九章まで書いてゐた時だと

いふ)に、人も知る『ドン・キホーテ』の質續編出版といふ事件が起きなかつたら、それに彼が刺戟されなかつたら、その完結はもつと延ばされてゐたゞらう、そして一六一五年と言へば彼の死に先立つ僅に一年といふ年なので、或はそれがもう見られなかつたかも知れない、あのドン・キホーテの悲愴な臨終は永久に此世のものとなつてゐなかつたかも知れない——それ程彼は『ドン・キホーテ』第二編の完結に急がなかつた。その第一編が世に現はれるや、作者セルヴンテスの名聲が忽ち國外の諸邦へまでも響いて行つた程、それが世間からうけられたのに、何故第二編の完成に彼はさうまで悠長な、むしろ不熱心な態度を執つたか。この問題はこゝでは預つておいて、その十年餘の間に彼が全力を傾注してものしようとか、つたのは戯曲の完成であつた、しかしこれは十分な成功が見られなかつた。その傍ら數種の物語を書いた、前に擧げた『模範的物語』その他に容められたものである。

それらの物語はどれもこれも、『ドン・キホーテ』の中で色々の人の口から語られる様々の挿話に似たものである。(『ドン・キホーテ』を讀んだ人の中には、その主人公の奇行よりも却つてその挿話の方に、多くの興味を覺える人がきつとあるだらう。)そしてそれらの物語の中で、『ドン・キホーテ』に次ぐ彼の傑作として知られて居るのが、本書におさめた『ジブシイの少女』である。

『模範的物語』の自序の中で作者は、『これらの物語の中には、色んな情事の含まれてゐるものもあるが、それらは頗る行儀正しく、よく整つて、理性と基督教的禮節にうまく適つてゐるので、それを讀む人々には、心ある者ない者を問はず、些のみだらな氣持も起きまいと思ふ』だとか、『もし諸君にしてそれらの物語をよく考へてみるなら、必ずやそこから有益な模範を引出すであらう、即ち、私がそれらを模範的と呼ぶ所以のものである』だとか、『私の企圖は、わが社會の眞中に、それでもつ

て各人各自心身を傷けることなしに娛しむことのできるやうな、一撞球臺を打建てようといふのだつた、けだし無邪氣な娯樂は害にはならないで益になるからである。何人も二六時中教會堂にあり、二六時中お祈りをしてゐる、或は二六時中その業務にたづさはつてゐることは、如何にそれが重要であらうとも、できない、そこで疲れた心を休養しなければならぬといふ場合のために娯樂の時間があるのである。散歩の並木が植ゑられたり、水流が遠地の泉から引かれたり、小山が平坦にされたり、庭園が念入りに培養されたりするのは皆その目的に向かつてゐる』だとか言つてゐる、そして『ともあれ一事を私は大膽に言明する、それはもしもこれらの小説がそれを讀む人々に何等かの悪い思考か欲望を吹きこむやうなことになるのであれば、私はそれらを世間へ發表するよりも、むしろそれを書いたこの手を切り落した方がいい』と思つてゐるといふことである。私は今や今後の生を茶化するには不似合ひな年齢にゐる、即ち私は六十四歳の餘である。』だとか言つてゐる。そして、それらの物語に對する世の批評家達の言は、獨創的で、經驗に深い、老功な作品だと賞め稱へてゐる。

本書の翻譯はナルタア・ケイ・ケリーの英譯からである。かなり難澁な半古典的文章で、それを出来るだけ忠實に、なるべく平易な現代語に譯さうとしたには、大分骨が折れた、それには先輩諸氏及び友人諸兄の助力もすくなからず加はつた、その方々の親切に對してこゝで篤く御禮を陳べておく。

大正十年四月

田 内 長 太 郎



ジ  
プ  
シ  
イ  
の  
少  
女

目 要 容 内

新 平 氏 著

ジブシイの少女……………一

コルネリア夫人……………一九三

二人乙女……………三二五

大體ジブシイといふ種族は竊盜ばかりをするためにこの世へやつて來たらしい。盜人の親達から生まれ、盜人のなかで育てられ、盜人の仕込みをうけた彼等は、遂にその天職に通じ、あらゆる點で完成されて、どんな惡事にも用を缺かないこと、なる。いや、もう彼等の竊盜を愛する心、及び、それを行ふ技倆と言へば、彼等の生から分離することのできない特質であつて、それは彼等の死の時まで決して失くされない。

さて、茲に、この種族に屬する或婆さんで、ケーカズ(羅馬神話、ハーキュリスの牛を盗んだといふ有名な盜賊)社會の老功兵として何不自由ないといふ隱居の身分を授つてゐた者が、ブレシオーサと呼んで自分の孫娘だと稱する一人の少女を育て上げることゝなつた。この子供

に婆さんは彼女自身の修得してゐたもの、彼女の有つてゐた技藝の様々な巧計をすつかり傳授した。小さいブレシオーサはジブシイ國の全種族を通じて最も嘆稱される踊手となつた。彼女は全種族の乙女達のうちで最も美しくて愼み深かつた、否、彼女はたゞにジブシイ間において著しく輝いてゐたのみならず、當時、その稱讚が評判の聲によつて世に鳴り響いてゐた、最も可愛らしい嫺雅かな娘達にも較べられる程だつた。太陽も、風雨も、總てさうした天候の移り變りも——それらにジブシイ達は、他のどの人民にもまさつて斷えず曝されてゐるのだが——花の如き彼女の容姿を傷け、彼女の手を褐色にすることは出来なかつた。そして更に驚くべきは、彼女を育て上げたその粗野な風儀が、却つて彼女がジブシイ族よりもつとい、何かの出でなければならぬといふことを顯はすばかりだつたといふことである。なぜなら彼女の會話には此上もない快さと優容さがあつた。成程彼女は河々としてゐた

が、いやらしい軽浮は尠しも見せなかつた。それどころか、彼女の快活には、一方、その舉止に眞摯な端正が著しくあつた。で、プレシオーサの面前では、老若を問はず、どのヒターナ(女ジプシイの意)も、淫らな唄をうたつたり、不體裁な言葉を發したりするわけに行かなかつたのである。

お祖母おばあさんは自分の孫まご兒にどういふ寶があるかといふことを十分見てとつた。そこで、老いたる鷺は、彼女の若い鷺の子に、その爪をもつてどういふ風に生きるかといふことを入念に教へ込むと、その子を飛ばさうと決心した。プレシオーサは、頌歌や、俗謡や、サギイデイラ(西班牙で行はれる一種の活潑な舞踊、通常二人で踊る。その伴奏も同じ名で呼ばれる。こゝでは後者。)や、サジバン(同じく舞踊、また伴奏の名である。)や、その他の小唄、殊にロオマン(西班牙とか羅馬とかの歴史をうたつた小唄で、韻をふんだ短い史詩的物語。)に富んでゐた。それを彼女は特別優雅に唄つた。つまり狡猾なお祖母おばあさんは、孫娘の若さと美しさに加へて、さうした技藝の堪能が、自分の資産

を殖やすのに最も善い用具であるといふことを経験から知つてゐたのである。それゆゑ婆さんはあらゆる方法をとつて旨くそれらの練磨を勵ました。そこにはまた詩人達の助力も缺けてゐなかつた、と言ふのも偽にせ似盲人に奇蹟を案出こしらへてやつて、彼等が慈悲深い信者達から利得するものを彼等と山分けにするやうな者がある如く、ジプシイ達にもものを書いてやることを辭さないやうな者があるからである。

プレシオーサは子供時代をカステイル(イベリア半島の北部及び中部にある西班牙の往時の王國。)の各地方に住んだ。しかし彼女が十六歳の時、お祖母さんは彼女をマドリード(西班牙の首府。)に、サンタ・バアバラの原野にある、ジプシイ達におきまりの野營地にと連れて行つた。マドリードは彼女にも顧客を得るに最も有望な場所だと思はれた。なぜなら其處ではあらゆる物が賣られたり買はれたりするからである。プレシオーサが始めて首都にその姿を現はしたのは、市の女護神であるサンタ・アナの祭禮の時だつた。そ



の時彼女は、優れた踊手である一人のヒターノ(男ツブツ)を指揮者とした、八人のヒターノ達によつて演じられる或舞踏の中に加はつた。他の者達もみな大變巧かつた。だがプレシオーサの美妙に至つては、全觀客の眼をすつかり蕩かしたほどだつた。羯鼓や四竹よったけの響のうちに、舞踏の最中に、プレシオーサの美麗と優雅に對する稱讚の聲がどつと揚つた。だが人々が彼女の唄ふのを——舞踊には歌が伴はれてゐたので——耳にした時には、そのヒターノの評判はそれの最高點に達した。そしてその祭禮での優秀舞踊者に與へる賞品として提供されてあつた寶石は、異議なく彼女のものとなつたのである。

サンタ・マリアの教會堂で、榮譽あるサンタ・アンナの像の前で、何時もの踊をした後で、プレシオーサは鈴でもつて品しなよく飾りつけられた羯鼓をとり上げた。そして素早く趾頭あしづ旋回をして、身の周圍まはりに廣い圓を開いて置いて、その日の女護神に

捧げる頌歌をうたつた。それはそれを聞く總ての人々から嘆賞されるものだつた。

或者は言つた——

『すばらしい少女だ!』

また或者は、『この娘がヒターノにあ惜しいもんだ。全く、何處かの旦那のお嬢様だと言つても恥しくない!』

また或者はもつとぞんざいな口のき、方をした——

『まあ、あの阿魔あまつちよが大きくなつてみる、お前達めえたちにおもしろい藝當を見せてくれらあ。あいつはそこらのでれ助共を引掛けようてえんで、滅法綺麗な網の絲目いとめをいまつな繋いでるやがるんだ。』

すると、また他の好人物ではあるが育ちの賤しい、愚鈍なのが、彼女の極めて輕々と踊るのを見て、『其處! 其處! よう、しつかり! 埃ほこりを粉々にまで碾ひいてく

れろよ!』

『え、大丈夫よ、』と彼女は、一步も踏み過たずに應へた、『妾、埃を粉々にまで碾くつもりよ。』

サンタ・アンナの晩拜式と祝宴にはプレシオーサも幾分疲労してゐた。だが彼女は、その舞踊に對すると同様、その美貌や、機智や、または慎重に對してひどく頌揚されること、なつたので、今や首都の何處へ行つてもそのことの他に何一つ語れないといつた有様となつた。

二週間の後、彼女はマドリードに歸つた。他の三人の少女達と一緒に、彼女達の羯鼓と或新らしい舞踊と、その他にロオマンズや小唄の新らしい仕入品を携へてゐた。だがそれらのロオマンズや小唄はすべて道徳的性質を帯びたものだつた。なぜならプレシオーサは、彼女と一緒にゐる者共に猥りがはしい唄をうたふことを斷

じて許さなかつたし、彼女自身もそれらを唄つたことがなかつたからである。老ヒ

ターナも彼女と連れ立つた。彼女はプレシオーサを何者か、連れ去りはしないかと

怖れて、今やアーガス(希臘神話、ジュピタアの妻ジュノの命をうけて、牝猿に變)の如く

に抜目なく彼女の張番をして、決して彼女の傍を去らなかつたのである。婆さんは彼女を孫娘と呼んだ。彼女も自分を婆さんの孫兒であると信じて疑はなかつた。

二

9  
トレード街の、木蔭で年若いヒターナ達が舞踊を始めると、忽ち観客の一群にとりまかれた。皆が踊るかたはら、婆さんは傍見の人々の間で金を集めた。人々はそれを大道へ小石を振りまくやうにばらくと投じた。なぜなら、美は眠れる慈悲心を喚<sup>よび</sup>得るだけの力を有つてゐるからである。一舞踊すむと、プレシオーサが言

つた——

『もし皆さんが四クオート(西班牙貨幣、一クオートは一ドルの四分の一)づ、下さるなら、あのマアガリータ女王様の初詣(はつまつで)を唄つた美しいロオマンスを妾獨(はなご)でうたひますわ。それは評判の作(さく)ですの、或名高い詩人が——詩人軍の總指令官と呼ばれてもい、お方がお作り下さつたね。』

彼女がそれを言ひきるか言ひきらないかに、環をなした人々の殆ど誰もが大聲に叫んだ、『うたつてくれ、プレシオーサ。さあ、俺の四クオートだ。』

さうして澤山のクオートが彼女に向けて投げ出されたので、老ヒターナはそれらを拾ひ上げるのに手の不足したくらゐだつた。その掻き集めが終ると、プレシオーサは羯鼓をとり上げた。そして約束のロオマンスをうたつた。それは聴衆全體が一聲となつて、噪しく再演を促された。『もう一度、プレシオーサ。もう一度うたつて

くれ。ついでに踊つてくれい。おい、お前のその足の下に地面(ぢべた)がある間は、お前にクオートは缺せないからさ。』

かうして二百人餘の人間が、そのヒターナの舞踊に見入り、唱歌に耳を傾けてゐた時、市の一陸軍中尉が其處へ通りかゝつた。彼は何事の群衆かと訊ねた。見事なヒターナがそこで唄をうたつてゐると聞かされると、陸軍中尉は、好奇心が動かすにゐなかつたので、同じくそれを聴きに傍へ寄つた。だが威嚴にかゝはるのを恐れて、彼はロオマンズの終るまで待たなかつた。とは言へ、そのジブシイ娘は頗る彼の氣に入つた。で彼は、それらを妻のクララ夫人に聞かせたく思つて、その夕方一隊を連れて彼の宅へ来るやうにと老婆に告げるため小姓を遣はした。小姓は使命を傳へた、老ヒターナは伺候いたしますと約諾した。

演技が終つて、演技者達が他の場所へ進んで行く途中、大變身装(みなり)のい、一人の小

姓がプレシオーサを追つかけて来た。そして彼女に一枚の折疊んだ紙を渡して、言つた。

『可愛らしいプレシオーサ、このロオマンズを一つうたつて貰へまいか？ 大變いゝものなんだ、なほ私は折々他のも上げよう、すれば君は世界中で一番いゝロオマンズをもつてゐるといふ評判をとるのだ。』

『妾は大恐悦でまづ此方から憶へませうよ、』とプレシオーサが答へた、『そしてきつとですよ、貴方、貴方の仰有る他のも持つて来て下さいね。ですが、それにはちよつとも猥りがはしいところがないといふ條件でね。もしもその謝禮金が欲しいのでしたら、それは打でもつて決めませうよ。それ以上謝禮金をあてにしちやいけません、それは出来なことですから。一打が唄はれましたら、一打分のお金が貴方のものとなりますのです。』

『もしプレシオーサさんがその紙代さへ拂つてくれ、ば、私は満足だ、』と小姓が言つた、『それも、出来榮の悪いのは勘定に入れなくつていゝがね。』

『選擇の權は妾にあるのですよ、』とプレシオーサが言つた。そこで彼女は仲間と一緒に目的地に向かつて街を進んで行つた。と、格子造りの或窓から四五人の紳士達が彼女達を呼んで手招いた。プレシオーサは立ち寄つて、地面に近い窓から、氣持のいゝ、調度のよくしつらへられた室を覗き込んだ。そこでは數名の騎士達があちこち歩いてゐる、また他の者は様々の勝負事をしてゐるのだつた。

『皆様、妾に勝得物を如何でございませうね？』とプレシオーサは、ジブシイにある舌纏れの訛で言つた。その訛を彼女は生得からではなく、嗜好から口利いた。プレシオーサの姿を見かけ、彼女の聲を聞きつけて、遊び事をしてゐた人達はテーブルをはなれ、残りの人達はぶら／＼歩きを止めて、みんな窓際に群つて来た。なぜ

なら彼女の名聲は既に彼等の耳にも達してゐたからである。

『はいれ！ 小さい方のも入れてやれ、』と騎士達は陽氣に言つた。『僕等は勝得物の分前をきつと與へるよ。』

『でも皆さんはそれで妾達をひどい目に遇はせるかも知れませんもの。』とプレシオリサが言つた。

『いや、紳士の名譽にかけて、』と一人が言つた。『誰一人お前の靴の足底にも觸るまいから、大安心ではいつて來たまへ。僕はそれをこの胸間に佩びた勳章によつてお前に誓ふんだ。』さう言ひながら彼は自分の胸に佩びたカラトラーブの勳章に片手を載せた。

『貴女、はいりたければ、プレシオリサ、』と彼女と同伴の一人のジブシイ娘が言つた。『ずん／＼さうしちやひよ。妾、あんなに男のどつさりゐる所なんかへ行くのは

いやよ。』

『ちよいと、クリステイナ、』とプレシオリサが答へた。『氣を付けなくちやいけないのは一人きりでゐる男の所よ。あんなにどつさりゐる所は何の恐ろしいこともありはしないわ。貴女だつてちやんと考へてゐるでせう？ クリステイナ。身を正しく

持たうと決心した婦人は一軍隊の兵士の中へ交つてもその通りだらうといふことはね。なるほど、誘惑の場合々々を避けるといふのはいゝことよ、だけど、危険の潜んでゐるのはこのやうな多勢人の集まつてゐる室の中ぢやないわよ。』

『ぢや、はいりませうよ、プレシオリサ、』と彼女の仲間が言つた。『貴女は巫女よりももつとよくものを知つてゐるわ。』

ジブシイ婆さんもまた皆をはいるやうにと勵ました、そこで問題は決つた。

彼女達が生にはいつて行くや否や、勳章の騎士がプレシオリサの携へた紙に眼を

つけて、それを取らうと手を伸した。

「あ、いけませんの、」と彼女が言った、「これはたつた今し方手にはいつたばかりのロオマンズですから、それにまだ妾も眼を通してませんから。」

「だが、お前、読む術を知つてるのかい？」と一人の騎士が言った。

「え、え、。おまけに書くことまでも、はい、」と婆さんが言った、「手前は、この孫兒をば辯護士様のお娘同様に育て上げてござります。」

かの騎士は紙を披けた、そしてその中に包まれてあつた一個の金貨を見出すと、言つた、「いやなるほど、プレシオーサ、この文句の内容は郵税の價值があると見えるね。それこのロオマンズの中には金貨が一つ包まつてゐるよ。」

「あの詩人は妾を乞食扱ひにしてゐるわ、」とプレシオーサが言った、「でもあゝした職業の人として金貨一つを投げ出すといふことは妾達風情がそれを受取るのよりも

随に變なことよ。もしもあの人のロオマンズがかうした附加物をつけて妾の許に来るといふなら、一般の作唄者をつかり寫して、それに一文づゝ入れて順々に送つて来てもらい、妾はそれらの價值を目方にかけてみませうよ。そしてもしそれらに善いところがあると判つたら、有難く頂戴いたしませう。貴方、その詩をまあ聲高に読んで下さいね。すればあの詩人が氣前のいゝ程も賢い人であるかどうかよく判るでせうから。」

依つて騎士が次の如く讀んだ、――

麗はしきジブシイ娘、嫉妬心すら汝をば

世の美しき乙女の中の、いと美しきものとや謂はん、

あゝ！ \*よくぞ汝が石の心に（\*ピエドラ・プレシオーサは「貴い重なる石」といふ意味である。）

汝のもつ名、プレシオーサの適<sup>かな</sup>へる。

もし美しきその如く、おなじく誇りと残忍に、

汝の姿の育つとなら、

呪はれてあれその土地、呪はれてあれその時代

おぞましき汝の色香を世に齎せし——

汝のうちなる \*バシリスク（\*往時アフリカの沙漠に住みしといふ蛇族の怪物、その睥視に遭へば忽ち死すといふ。）

そは見る我等を惱殺す、

さても温和ならざる汝が帝土、そは

我等の意志に虐政を敷くもの。

いかなればかゝる容色の、ジブシイ族に生れしか？

吹きすさぶ疾風より、庇護<sup>かまひ</sup>もなくに。

いかなればかゝる疵なき貴橄欖石を

賤しきマンザナリース（名河）の出しえし？

川よ、そがため汝<sup>なれ</sup>は世に名を揚げん、

金色なせるかのテーガス（名河）のごと、

なほプレシオーサのためには、

水裕かなるガンガス（名河）よりも重じらるべし。

身の上占ひにて、誰か言ひ得る

いかなる被欺者か汝の口の端にかゝりて身を破滅すと?

幸運をば汝はほゝゑむ口にて語る

されど不運なるかな、汝にほゝゑまるゝその人々、

噂にきけば誰もみな、魔法使女、

ジプシー族のをんな共は、

されば世間の男等は、いとも露はに見るならん

汝の顔に魔力あるをば。

百千々に異なる汝の手法

人の思ひを意のまゝにする、そがために停まりあるは動く、

喋り、唄ひ、黙えゐる、進み、退く、

なほまた戀の焰を焚きつけます。

いかなる我儘氣隨者も、汝の前には身を屈し、

自由の誇りを失ふなり、

論より證據の我、汝に身も魂も囚はれし奴隷、

よし能ふとも、自由の身をば希ひ願はじ。

この數行を、汝貴き愛の寶玉よ、

そが稱讚にはすべての詩力も及び難き、



汝のために生きもし死にもすなる者、  
汝の貧しき、賤しき愛人は送る。

『その詩はおしまひの行が「貧しき」で終つてゐますのね。』とプレシオーサが言つた。『それはよくない兆しるしですわ。戀人達はお互が貧しいなどいふ言葉で始まるもんどちやありませんわ、なぜなら、貧乏といふものは戀の大敵だと妾には思はれますも6。』

『おや、一體誰がお前にそんなことを教へたんだね?』と一人の騎士が言つた。

『誰が教へるもんですか、』と彼女は答へた。『妾は妾の身體のうちに魂をもつちやるませんか? 妾は十五歳ぢやありませんか? 妾は理解力ちのわかりの點で跛びつこでも、隻足ちんぱでも、足無しでもありませんのよ。ジブシイ娘の才智はほかの世人を導くのと異つたコム

パスで舵をとつてゐるのです。彼女達は何時も年齢としよりかすつと先にゐるのです。愚鈍なヒターノとか、馬鹿なヒターナなんて者は一人もありはしませんわ。彼等が食くべて行かうといふのには、たゞもう抜け目なく機敏すばしこいことではなければいけませんので、彼等は一步ひとあひみごとにその才智を磨ひくんです、決して足の下へ苔を生やかすやうなことはしませんわ。御覽なさい。妾の仲間の娘達を、みんなしんと黙もくつてゐます。貴方がたがあれを鈍物だとお考へなされるのは御隨意ですが、まあその口の中へ指を突込んで、そこに智慧齒が生へてゐるかどうかお驗しらべ下さい、すれば妾のお目にかけていたと思ふものが貴方がたにもおわかりでせう。一體、十二歳のジブシイ娘でほかの民族の二十五歳の者に匹敵するぐらゐに、ものを知らないやうな者は一人だつてありませんわ。なぜなら彼女達にはもつて生まれた根性と、その教官に澤山な實地應用があるんですもの。そこで彼女達は他ほかでは一年もかゝることを一時間

かそこらのうちに覚え込んぢまひますわ。』

人々はそのヒターナのお喋りを大變面白がつた。そして誰も彼も彼女に金を與へた。婆さんは三十リアル(リアル、西班牙の)を財布に入れた。そして、他日また皆を連れて、さうした氣前のい、紳士達を楽しませにやつて來ようと約束した後で、蟋蟀のやうに楽しげな一群を率ゐて、中尉殿の宅へと去つて行つた。

三

中尉の妻の、クララ夫人は、ジブシイ達の豫定の訪問を既に報ぜられてゐた。

そこで彼女や彼女の宅の女達、並びに近隣の婦人達は、恰も五月に夕立を求めめる者のやうに、熱心に彼女達を待設けてゐた。人々はブレンシオーサを觀ようとてだつた。ブレンシオーサが仲間と一緒に、その中で恰も薄明のうちの炬火の如くに輝いてはいつて來ると、すべての婦人達は彼女の方へ押寄せた。或者は彼女に接吻をし、或者は彼女をしげくみまも贖つた。また或者は彼女の美しい顔を、また或者は彼女の優雅な舉動ものごとを讚嘆した。

『これこそ、皆さんが金髪と呼んでいゝものです、』とクララ夫人が叫んだ、『これが生粹のエメラルド眼ですよ。』

近隣の婦人はそのジブシイ娘を細々と切り刻んで検査した。彼女はブレンシオーサの手足や關節でもつて一皿のペ、トリーア(家禽を切り刻んで料理したもの。)を拵へた。そして遂に彼女の顎の笑靨に至つて言つた、『まあ、何といふ笑靨でせう！ 一目見たら誰だつてはまりこ陥込まないわけに行かない穴ですわ。』

すると、クララ夫人に伺候してゐた、年老つた長い鬚のある一紳士が叫んだ、『これを笑靨だと仰有るんですか？ もしさうだとすれば、私には笑靨の何たるかが

まるで判りませんね。何、これはちつとも笑靨ぢやありませんよ、生肉を葬る墓場ですよ。私は神様に誓つて申しますが、この娘はすてきに風味のいゝ生物です。この娘が白砂糖の捏粉で作られるとしてもこれ以上美味くなりつこありませんね。これ、お前に身の上占ひが出来るかい？』

『お手のものですわ。三通りでも四通りでもやり方を知つてゐますわ。』とプレシオーサが答へた。

『おや、お前にはそれも出来るの？』とクララ夫人が叫んだ。『では旦那様の身の上と一緒に妾の身の上を占つておくれね。黄金の娘、白金の娘、眞珠の娘、紅玉の娘、天上の娘、いや口では逆も言へないその上の娘、いゝかね、』

『奥様、貴女様のお手掌をその娘に差出して御覽じませ、その上へお烏目で一文字形をこさへましてね、』と年老つたジブシイが言つた。『しますればあの娘が貴女様に

何かと申上げるでござりませう。全くあの娘にはお醫者様よりもつとものがよく判りますのでね。』

中尉夫人は手を衣囊に押入れた、しかし空つぽだつた。で、彼女は女中達にクオートの貸與を乞ふた。だが誰一人クオートも有つてゐなかつた。近隣の婦人とても同様だつた。これを見るとプレシオーサが言つた。

『一文字形の材料には何だつて結構ですわ。でも、金か銀かで出来てゐるものが一等ですわ。銅貨でもつて一文字の記號を拵へることになりますと、皆様は斯様に御承知下さなければなりません。それは御運を減らかしますとね、尠くとも妾の占ひがさうなりますの。妾は何時も、いゝ金貨か、もしくは八リアル貨幣か、せめて一クオートかで手掌に一文字を拵へて頂いてからやり始めるのが好きですわ。つまり妾は十分なお布施のある時には御機嫌のいゝ坊守さん達と同然ですもの。』

『何てお前はかしこいだらう、』と訪問者の婦人が言つた。それから紳士に向つて『コントリーラスさん、貴方ひよつと一クオートぐらゐる持つちやゐない？ もしお持ちでしたら、出して下さいな。うちの人が見えたらすぐお返しするから。』

『もつてるますよ、』とコントリーラスが答へた、『だがそいつは食料料二十二マラヴエデイ(西班牙の小銅貨)のかたにとられてゐるんです。それだけ出して下さつたら、そいつを取りに飛んで行きませう。』

『妾達の間は一クオートのお金もないんですよ、』とクララ夫人が言つた、『それを貴方に二十二マラヴエデイですつて？ 勝手になさいよ、コントリーラスさん。相も變らぬ、うるさいお愚物さんねえ。』

その家の窮乏を見て、その場に居合した乙女の一人が、プレシオーサに言つた、『ちよいと、その一文字を拵へるのに銀の指套では駄目？』

『結構よ、』とプレシオーサが言つた、『實を言へば銀の指套で出来た一文字が一等いのよ。もしそれが澤山にあるやうでしたらね。』

『こゝにあるわ、』とその乙女が言つた、『よかつたら、これを。尤も妾の運もそれと一緒に占つておくれよね。』

『滅相もない、たつた一つの指套でまあそんなことが！』と老ジプシイが叫んだ。『さあ大急ぎだよ、お前。もうぢき夜だよ。』

プレシオーサはその指套をとつた、そして口占くちんを始めた。

美しい奥方様、美しい奥方様、

きれいな銀のお手をもつ、

どんなにそなたの旦那様が、そなたを深く愛してゐるか

申し上げるは餘計なこと。

そなたは鳩、親切のお乳汁、  
されど時にはそなたにしても  
蠻地の牝獅子や、虎の如くに  
荒れ狂はるゝものかしら。

嫉めばそなたも齒を示さずば、  
ほんに中尉の悪ふざけ。  
お官吏やくじんにもつかしからぬ  
こそく遊びの色あさり。

けに惜しいこと！ そなたがきれいな乙女の折に

そなたを口説いた眞實男。

忌々しいのは邪魔した奴等！

對のお雛ひなが出来てゐたのに。

眞まことのところ、言ひたくないが、  
ついでに言はして頂きませう、  
そなたは今に色寡婦こけさん、  
二度と再び嫁入なさる。

お泣きなされるな、優美なお方、

誰も知ること、ヒタナが何時も、

法の眞實を語るでないど、

されば優美な奥方様、お泣きなされるなそのやうに。

別れて思ひが辛ら過ぎる、

そんな情ある殿御なら、

そなたが前に死ぬのほかない

寡婦の運命を逃れるために。

心配なされるな、そなたはあまたの材寶を、

繼承ぐでせう、瞬くうちに、

そして一人の息子ができる

それは坊さん——何處の寺にもあらはれない、

トレードか、いや、そんな筈はない、

それから一人の娘さん——はてこれは——

さう、さう、尼院長に上るであらう、

——もしも、その娘が尼となつたら。

もしも今から四週の内

そなたの旦那が死なぬとならば、

バアゴス、あるはサラマンカが、(市名)  
 彼を市長と仰ぐであらう。

そのまた間の旅は禁もつ、

そなたの歩む何處にも、多くの畏を、

きれいな婦人の足を狙つて、

悪い男がかけてある、お氣をつけなされ！

なほより意外な餘のことどもは、

次の金曜を待ちなされ、

それはそなたを喜ばせまた驚かす、

その時黄金こがねがお手を横切るとなら。

35  
 プレシオーサがその家の女主人のためにこの神託の歌曲を了へたので、居合した残りの人々は誰も彼も同じく自分達の身の上を占つてもらひたがつた。だが彼女はそれを次の金曜日まで延ばした。で人々はその時には彼女の手掌を横切らすためにきつと銀貨を用意してゐるからと約した。その時、中尉殿がはいつて來た。そしてその呼びもの、ヒターナの魅力や藝能の眼覺ましかつたことを耳にすると、彼女と彼女の仲間を可なり踊らした後で、プレシオーサに與へられた頰辭を力強く確證した。そして手を衣囊ポケットに突込んで、暫くその中を手索りに掻き搜した。だが遂に空っぽの手を引き出して、言つた、『確に僕は一文も持つてゐない。クラアラさん、プレシオーサに一リアルやつておくれ。それはぢき貴女に返して上げるから。』

『それはまことに結構ですがね、貴方、』と夫人が答へた、『でもそのリアルは何處から出ますの？ 妾達のうちには手に一文字を拵へる一クオートさへも見つかりませんでしたよ。』

『では彼女に小飾玉か何かおやり。プレシオーサには又の日こへ來てもらひたいんだから。その折にはもつとよく待遇すのさ。』

『いえ、』とクララ夫人が言つた、『今日は何にもやりますまい。すればあの娘はきつとまたやつて來るにきまつてゐますから。』

『その反対よ、』とプレシオーサが言つた、『何にも下さらないやうでしたら、二度と再び妾はこへ参りませんわ。狡猾をおやりなさいよ、中尉様、狡猾を。すればお金が出來ますのよ。新式なことはなさらないで、ほかのお役人様方同様になさいましな。でない、貴方様は飢え死にですよ。御覽なさい、妾だつて皆様方の仰有る

のを聞いて知つてゐますわ、どの官職からも、いざとなれば罰金は幾らでも拂ふことができ、その上他のお官職に就かしてくるだけのお金は十分拵へられますつてね。』

『そんなことは良心を少しも持つてゐない手合ひが言つたり爲たりすることさ、』と中尉が言つた、『だが己が義務を盡す裁判官には何の罰金を拂ふわけもないからね。そしてその職務を立派に了ふといふことが、他の職務に就くのに最も善い手助となるからね。』

『貴方様はまるでお聖人様そつくりのことを仰有いますのね、』とプレシオーサが答へた、『まあその通りお暮し遊ばせ、妾達は貴方様の古上着の切れつ片でもお聖物に頂きませうから。』

『お前はなか／＼いろんなことをよく知つてゐる、プレシオーサ、』と中尉が言つた



「いや判つたよ、僕は何とかしてお前を兩陛下に引見はしてやらう、全くお前には王様にでもお目通りをする資格があるんだから。」

「すると妾は道化者を仰せつかるでせうね。」とジブシイ娘が言つた、「ですが妾には逆もその職業はおぼえられませんか、ですから貴方様のお骨折はすつかり無駄ごとになりませうよ。それとも妾が賢いからといふので妾を引上げて下さるのでしたら、或はものになるかも知れませんがね。ですけれどそこらの宮殿では道化の方が賢い人々よりもつと榮えてゐますのね。妾はヒターナで、貧乏で澤山よ。神様のお好き通りに始末して頂きますわ。」

「さあお出で、娘、」とジブシイ婆さんが言つた、「もういゝよ。お前はするぶんお喋りをしたね、わしが教へ込んだ上越して數々のことを知つてゐる。機智にあんまり鋭い尖頭をつけるのはお止しよ。鈍る恐れがあるから。年齢相應のことをお喋り、

高い綱渡りをするのぢやない、つい落こちるといふことがある。」

「このジブシイ共にや敵はない、」と、彼女達が辭去を告げるのに、興がつた中尉が言つた。

指套の乙女が暫時彼女達をとめて、プレシオーサに言つた、「妾の身の上も占つておくれよ、それが嫌ならその指套を返しておくれ、妾は仕事するといつたつてその他に一つも持つてゐないから。」

「お娘さん、」とプレシオーサが答へた、「貴女の身の上も今ので占はれたことにしときなさいよ。指套は他ので間に合はせなさいよ。さもなければ金曜日には妾がまた上るまでお客は一人もとらないでいらつしやいな。金曜日には貴女が色んな武者修行の書物で讀むよりもつと數々の身の上占ひや運試しを言つて上げませうから。」

ジブシイ達はその場を去つた。そしてエーヴ・マリアに當つて何時ものやうにマ

ドリードから己が村へ歸つて行く許多の工女達と落ち合ふと、彼女達はずつと身が安全なといふところから常にする如く、工女達の仲間に加はつた。ジブシー婆さんは誰かが彼女の孫娘を連れて逃亡しはしないかといふ不斷の恐怖に生きてゐたからである。

## 四

二月六日 議侯屋

その後の或朝、彼女達が掠りを取立てるために他のヒターナ達と一緒にマドリードとして歸つてゐた時、市から五百碼ばかり離れた小さい谷間で、彼女達は立派に着飾つた一人の年若い秀麗な紳士に出會つた。彼の長劍及短劍は黄金のブレードオだった。彼の帽子は寶石の鑲められた紐でもつて周圍を結ばれ、様々の色彩をした羽毛でもつて飾り立てられてあつた。ヒターナ達は彼を見ると歩を停めた。そして

この早朝にかうした場所でそんな立派な騎士が單獨りでしかも徒歩であるといふのにいたゞ驚いて、その男の舉動をゆつくり觀察し出した。その男は彼女達の方へやつて來た。そして最年長のヒターナに話しかけて、言つた、『さて、友達。私は君及びプレシオーサに、内密で私に二つの言を陳べさして頂くの恩恵を與へられんことを懇願する。それは君に利益をば齎すであらうから。』

『よろしうござりますとも、』と婆さんが言つた、『では手前共をあまり長くお引止めなさらないやうに、いやあまりお手間のとらないやうにお願いいたします。』

そこでプレシオーサを呼んで、彼女達は二十歩許りの距離に身を退いた、そして其處に立ち停つた。と、若い紳士は彼女達に向つてかう口をきつた。

『私はプレシオーサの美と機智とにすつかり參つてゐる、この嘆賞を克服しようとな無駄骨を折つてみたが、遂にその努力の能はぬを知つた。淑女方よ、蓋し私は神が

もし私の意圖を嘉みするものなら私は君達に何時もの尊稱を與へるであらう。私は騎士だ。この衣服が君達に示してゐる通り、そこで彼は外套を披いて、西班牙に於ける最高の一勳章の徽章しるしを見せ示した、『私は——の息子だ、』（こゝで彼は我々が明かなる理由からそれを隠蔽する一人物の名前を口にした。）『そして今なほ保護と支配の下にあるのだ。私は一人息子だ。そして莫大な家財を繼承ぐこと、なつてゐるのだ。私の父はそれあの首都にゐる、そしてさる地位につくのを待つてゐる、それはもつ萬事成功するばかりになつてゐるのだ。そこで私は今君達に言明したやうな高い位貴い身分なのだが、それもプレシオーサのために、彼女を私自身の高さに引き上げ、吾同格者に吾妻にしようとして、依然大領主たらうと望んでゐるのだ。私は欺かうと圖つてゐるのでない。私の彼女に寄せてゐる戀は如何なる種類の欺瞞にも深かすぎる。私はただ彼女に仕へたく思つてゐる、それが彼女を喜ばすならどんな遣

方でもいゝのだ。彼女の意志は私の意志だ。彼女にとつて私の心は彼女の好きな通りに捏ねられる蠟だ。さうしてただ彼女がその上に捺す印象は何でも大理石のやうに永久に保持するといふのだ。もしも君達が私を信じてくれるなら私は他の如何なることからも少しも勇氣を失ふまい、しかしもしも君達が疑ふなら、私はがっかり力を落すだらう。私の名前は——だ。父の名前は先刻言つてある。彼はこれ／＼の街のこれ／＼の家に住んでゐる。君達は私や彼のことを隣人達に、またその他の人々に尋ねてみるがいゝ。吾家の名聲や地位は、君達が役所で、或は首都の至る處で一々私達のことをきかなければならないほど朦朧とはしてゐないのだ。私はこゝに君達に提供しようと思つて金貨百クラウンを所持してゐる。今後とてもこの通り君達にものを與へたいと心から思つてゐる。何故ならその魂さへ打込んでゐる男であればその財寶などは少しも吝まないだらうから。』

騎士の話してゐる間、プレシオーサは意を凝らして彼を瞞めてゐた。そして疑ひもなく彼女は彼の言語にも人物にも何一つ嫌悪するものを認めなかつた。婆さんを振返つて、彼女は言つた、『お祖母さん、あの、妾自身で勝手にこの戀慕に悩んでゐる紳士様に御返答申上げていいの？』

『お前の好きな通り何なりと御返答申上げな、孫娘、』と婆さんが言つた、『わしはお前がもうどんなことにも十分な分別をもつてゐると知つてゐるんだから。』  
そこでプレシオーサが始めた。

『騎士様、』と彼女が言つた、『妾は貧しいヒターナ、賤しい生れに過ぎない者でございますけれども、それでも妾の身中には奇妙な小さい魂がございますの。その魂が私を動かしてゐるんな多くの物事をさせるのでございます。約束が妾を釣り込むことはできません、同じやうに贈物が妾の決心を弱めることもできませんし、お追従が誑

かすことも、または色仕掛の手管が妾を籠絡することもできません。お祖母さんの勘定では、妾はこのミケルマスでやつと十五歳なのですけれども、考へることはもう年老つてゐますの。そして妾と同じ歳の人々に普通できますよりもすつとものが解りますの。これは、多分、經驗からよいか生得から來るのでせうね。でもそんなことはどうでもいゝとしまして、妾には戀の熱情の激烈なものであるといふことはよく解つてゐます、それは意志の流れを手荒くひん曲け、それをあらゆる障礙に狂暴に衝突らせ、そして何も構はずその念がけた目的物を追つかけさしますの。ですが往々にして戀する人が首尾よくその望みを達したと思ひ込んだ瞬間に、その人は失望の地獄へ陥込むことゝなるのです。かうも言へます、目的物が手に入る、と、戀した人はもうすぐそのひどく念がけた實に飽きが來ます。そして智慧の眼を開いてみますると、前にはあんなに一生懸命愛慕してゐたものが今は嫌らしいものとなつ

てゐるのでございます。さうした結果を考へる恐しさが妾に大きな疑惑を吹き込みましたので、妾は言葉に信用を措かず、多くの行爲おこなひを疑ひますのでございます。妾のもつてゐるたつた一つの寶石、生命にも代へ難いもの、それは妾のまだ汚されないう純潔なのでございます。それを妾は約束や進物で賣らうとはいたしません。もしもそんなことで賣られますなれば、それが買へますものなら、その價值ねちといつてはほんにつまらないものとなりますものね。なほまたそれは手管や詭計をもつても妾からかつばらふ譯に参りません。尤もらしいお話や空想に釣られてそれを危険に曝すくらゐでしたら、いつそのことそれを身につけて妾の墓場まで、もしかしたら天國まで持つて行つた方がましですわ。それは花ですの。どんな者にも汚すを許されてゐません、なほできますれば心の中でも、薔薇をその小枝から摘み剪つてごらんさい、どんなに早くそれは萎むでせう！ 一人はそれに手を觸れます、ま

た一人はそれの匂ひを嗅ぎます、そのまた次はそれの葉を扱ります、かうして遂に花は野卑な手のうちに枯れてしまふのです。紳士様、そこで貴方様がこの獲物を求めて來ましたのでしたら、貴方様にはそれが婚姻といふ紐で縛られないでは迎もお持ち歸りなさることができませんとお考へ下さい。もしも貴方様に妾の配偶者つれあひとなるまでのお氣がございましたなら、妾は貴方様のものとなりませう。ですけれど、まづそこに果さなければならぬ多くの條件と、確めなければならぬ多くの要點とがございますの。

『まづ第一に妾は貴方様が御自分をそれだと仰有つてゐるやうなそのお方であるかどうかといふことを知らなければなりません。その次に、このことが眞實ほんとうとならなければなりません、それは貴方様がすぐにもお父様のお邸宅やうたをお退ちになつて、それを妾達のテントに見代へなさらなければならぬといふこと、そして其處で、ジブシ

イの衣服を着て、妾達の學校で二ヶ年を過ぎなければならぬといふことでもございませう。しますればその間に妾は貴方様のお性質を十分確かめることができませうし、貴方様も妾の性質がだん／＼判つて來ますでせう。そしてその期間の終に、もしも貴方様が妾をお好きになり、妾もまた貴方をといふことになりましたれば、妾はこの身を貴方様の妻として貴方様に差上げるのでございます。ですけれど、その時に至るまでは妾は貴方様の妹、貴方様の卑しい婢女、たゞそれだけのものでもございますの。紳士様、そしてこれを御勘考下さい、その修業期の間、貴方様の御眼力が、それは今のところ失はれてをられるやうに、尠くとも狂はれてゐるやうに、お見受けいたしますが、その貴方様の御眼力が元通りにおなりなさるかも知れないといふことをね、その時には貴方様は今いくらお慕ひなさつてゐる者でも避けたがい、とお思ひなさるかも知れないといふことをね。しますれば、貴方様は喜んで失はれた自由を取返されるでせうし、さてそれをしますれば、心から後悔なされて過失のお宥免をお宅から頂くのでございませうよ。もしもこれらの條件を御承知の上で貴方様が妾達の仲間に御加入なさらうといふのでしたら、事件は貴方様御自身の御掌中にあるますわ。ですけれど、もしもそのうちの一つでも駄目でしたら、貴方は妾の指一本にも觸つて下さいませうな。』

若者はプレシオーサの決意に愕然となつた。そして恰も呪文に縛られた者の如くに、地上に眼を落して、見たところ如何なる返答をなすべきかと思慮するらしくぢつとしてゐた。それを見ると、プレシオーサは彼に言つた。

『これは即座に解決する、いや解決のできるやうな、そんな輕々しい問題ではございませんの。紳士様、市へお歸りなさい、そしてどうなさつた方が一番よろしいかととつくり考へ下さいませう。それから貴方様のお好きな週日に場所を違へず、妾達

がマトリードへの往復の時、こゝで妾にお話し下さいまし。』

『神が私にお前を戀するやうにと定めた時から、プレシオーサ、』と騎士が答へた『私はお前のために、お前の心が私に求めるものなら、どんな事でもしようと思つたのだ、尤もお前が今したやうなそんな要求が来ようとは思つてもみなかつたがね。だが私がその要求に應じるといふことがお前の喜びとなるのなら、今後私をジブシイの一人に數へてくれ、そして私に思ふ存分の試みを加へてくれ、すればお前は私が今公言すると同じ態度を何時もお前に向けてゐるのだと判るだらうよ。この衣服が變へて貰へる時を決めてくれ。私はフランダズへ行くといふ口實の下に宅を出る、そして暫くの間自分を支へるだけの金を持つて来よう。八日もかれば出發の準備はできるだらう、そしてその目的が首尾よく達せられるやうに、從者達から逃れる工夫を何か考へ出さう。そこでお前にお願ひがある、(もしも私に禮を

缺いてものを乞ふ資格があるなら、それは私のことや私の家のことを尋ねるために行く今日を除いて、再びマトリードへは行かないでくれといふことだ。私はそこで起きる許多の機會のどれかに、私がこんなにまで高價に値ふみしてゐる大財寶を奪ひ去られたくないのだから。』

『お止しなさいましよ、伊達紳士様、』とプレシオーサが言つた、『妾は何處へも勝手に縛られずに行かなければなりませんわ。妾の自由は嫉妬のために抑へられたり煩はされたりしてはなりませんわ。と申しましたも御安心下さい、妾はそれをそんなに過度にまで行ひはいたしませんから、いえ却つて何方にも妾の誠實が妾の氣儘と一様であるといふことを一哩手前からでも知らして上げますからね。それゆゑ、妾が貴方様に賦課しなければならぬ第一の税金は、貴方様が妾に何處までも實があると思ひ込むことですわ。なぜなら嫉妬で始まる戀人達は、馬鹿けてもる、また

不實でもありませんものね。』

『いやお前の身中にはきつと悪魔でも住んでるよ、』とジブシイ婆さんが言つた、  
『まるでサラマンカの得業士様のやうに喋るなんて。お前には色戀だとか嫉妬だとか實があるだとかいふことがすつかり解つてゐる。一體どうしたことだへ？ おかけでわしはまるでお馬鹿さ、ぼかんとなつて聽いてゐる。とり憑かれ者が知りもしないで羅典語を喋つてゐる、そいつを聽いてゐるといつた恰好さ。』

『黙つていらつしやいよ、お祖母さん、』とブレシオーサが答へた、『貴方の今妻から聞いたのはみんな妾の心の奥に残つてゐるもつと立派な澤山の眞理に較べたらほんの取るに足りない瑣事なのよ。』

ブレシオーサの言つたすべて、彼女の披瀝した正しい分別は、戀慕に惱める騎士の胸に燃えてゐた火焰へ薪を加へた。どゞのつまり、彼等は一週間目の其日にこの場で出會ひ、その節彼が事件のどういふ風に彼と折れ合つたかを報告しようといふこととなつた。そこで若い紳士は金貨百クラウンはいつてゐるといふ、金絲銀絲で織りなされた金入を取り出して、それを婆さんに與へた。しかしブレシオーサはその金をうけとることを斷じて肯じなかつた。

『これ、お黙り、娘、』と彼女のお祖母さんが言つた、『この紳士様が御承知なすつたといふ何よりの證據は、歸服の表象にかうして私達へ施物を下さるといふにあるんだよ。物を下さるといふことは、それがどんな場合であらうと、何時も氣前のいゝ方の看板となるんだよ。それにわしは自分の至らぬところから、ヒターナ共がこれまで長の歲月とつて來た、お錢には目がないといふ評判を墮すやうなことにしたくないのさ。お前はわしから百クラウンを失くしたいのかへ、ブレシオーサ？ まあ積もつてもみな、お前、もしも悪い目がで、子供の、孫の、それとも親類の誰かが裁



判官様のお手に罹るやうな事になつた時、この金貨がお方様の財布に迂り込む時の音楽ほど裁判官様のお耳にはつきりと響くものがまたとあるかへ？ 三度といふもの、三つの異つた犯罪から、わしはすんでの事に驢の上でお鞭を頂戴してゐたんだよ。だが、最初は小碗一杯の銀で助かり、その次は眞珠の首飾で、三度目は八リアル四十個のおかけさ。おまけに二十リアル投げ出して、それをクオートに取換へたのさ。よくものを考へてみなよ、お前、わし達の商賣はあぶないものだよ、危険や災難だらけさ。だからしてこの大フライリップ様からの有難いお施物に勝つてわし達は何時なと間に合ふ庇護や救助を與へてくれる物は何一つありはしないよ。どんなものだつてこのプラス・アルトラ(貨幣のこと)には敵はないんだよ。ダブルン(西班牙の十六圓位)の兩の面に向へば、太守様やまたどんな意地悪なお役人様のおそろしいお顔にもこくく笑ひがやつてくるのさ。さういつた方々様はわし達哀れなヒタ

一ナ共にはとつとの因業者で、わし達を大道泥棒よりかひどい日に遇はしてゐるんだからね。構ふことはない、それぢやわし達は何時までもみじめなぼろ／＼の外装(な)でるようよ、方々様はわし達が貧乏だとは思はつしやらないで、却つてぼろ／＼で脂ぎつてお寶たんまりといふ、ベルモントのガブショウスの胴衣(ダレット)のやうに言はつしやるだらうから。』

『ちよいと、お祖母さん、もうい、のよ、』とプレシオーサが言つた、『お金を藏ふのにそんなにどつさり文句を併べないで、黙つてお藏ひなさいよ、それがたんと貴女(あんた)のお役に立つでせうから。妾は妾で神様にお願ひするわ、それを貴女がお墓の中へ埋めてしまつて、其處からもうそれが明處へ返つて來ないやうにとね、さうしてそれはちつとも使はないで濟むやうにとね。それにしても、そのうちの幾らかを仲間の人々にやらなければいけないわ、みんなきつと妾達をこんなに長く待つて飽き飽

きしてゐるんだらうから。』

『あれらが土耳其古皇帝のお目通りをした曉にはこの財布から貨幣を一つやらあね、』と婆さんが答へた、『この好紳士様はまだ幾らか銀貨かそれとも銅貨の少々でも残つちやらないかどうかお捜しなさるだらうよ、あれらに分けてやるためにね。いや何あれらは少しでも頂けばそれでもう大喜びだらうから。』

『さうだ、私はもつてゐる。』と彼が言つた。そして彼は衣袋ポケットからヒターナ達に分つ八リアル貨幣三個を取り出した。それによつて彼女達は敵手と競争して勝利者の貼紙をされた時の劇場支配人よりももつと喜んだ。

そこで結局一行は、前に言はれた如く、一週間目にこの場所で再び會合しよう、又その若者のジブシイ名はアンドリュウ・カバリローオでなければならぬ、何故ならそれはジブシイ間にはまだ聞えてゐない名前であるから、といふことに決つた。

アンドリュウ（これから私達は彼をさう呼ぶ事にする。）はただ一瞥をもつてプレシオーサに彼の真心を射込んだゞけで、思ひ切つて彼女を抱擁することができなかつた。謂はゞ、彼はそれをしないで行つてしまつた、そしてマドリッドへ歸つた。

ジブシイ達も間もなくその後を追つた、プレシオーサは、秀麗で快活なアンドリュウに既に一種の興味を覺えてゐたが、彼が眞實彼の言ふ通りの者であるかどうかをしきりに知りたがつた。

彼女達がまださほど遠くへ行かない時、詩と金貨の小姓に會合した。

『やあこれは、プレシオーサ、』と彼が言つた、『この間上げた一句は讀んでくれたかね?』

『貴方に一言お返事する前、』とプレシオーサが言つた、『貴方はね、貴方の最も愛するすべてに誓つて、或事を妾に打明けなければいけませんわ。』

『その懇願に逢つては、』と彼が答へた、『私はどんな質問に對しても返答を拒むことが出来ない、よしこの首が飛ぶこと、ならうとも。』

『さう、では、妾の知りたいといふのはこれですの。貴方は、ひよつとしたら、詩人ではありませんの？』

『もし私がそれだとすれば、それは確にひよつとしたらだ、』と小姓が言つた、『だがお前は知らなければならぬ、プレシオーサ、詩人といふ名前を有つに値ひする者は極めて稀であるといふことをね。従つて私は詩人ではなく、たゞ詩歌を愛する者に過ぎないので。それでも私は自分自身それを使用する場合には他人から借りはしないのだ。私がお前に上げた詩は私のものだつた。尤も今お前に上げるこれらとて同様だがね。だがそれにしても私は詩人でない——斷じて。』

『詩人であるといふことがそんなに悪いことなのですの？』とプレシオーサがたず

ねた。

『悪いことではない、』と彼が返答した、『しかし詩人であつて、たゞそれだけであるといふことが大變い、ことだと私は主張しない。私達は詩歌を貴重な寶石の如くに取扱はなければならぬ。その所有者はそれを日毎には着けず、かつ萬人には示さず、たゞ適當な時にのみそれを見せびらかすのだ。詩歌なるものは、身持の潔い、正直な、慎み深い、内氣な、そして完全な上品の限界からは決して一步も踏み出さない、美しい乙女なんだ。彼女はさびしい處が好きだ。彼女は泉や、牧場や、樹々や或は花の間に快樂と更新とを見出すんだ。そして彼女と親しく交はる者皆を甚く歡ばし、かつ教化するんだ。』

『お言葉ですけれど、』とプレシオーサが言つた、『彼女は此上もなく貧乏で、一口に言へば少々乞食臭いといふことを妾は聞いてゐますわ。』

『むしろ反対だ、』と小姓が言つた、『なぜなら富裕でない詩人なんて一人もないからね、彼等がみんな自分の境遇に満足して生きてゐるからにはね。だがそのことは極少數の人にしか解らない一片の哲學なのだ。それにしてもプレシオーサ、何に感じてお前はさうした問を發するんだね？』

『それはね、すべての詩人、尠くともその大部分は貧乏人であるものと信じてゐたところへ、詩の中へ巻き込んで貴方の下すつたあの金貨が妾を少し驚かしたんですもの。ですけれど貴方が詩人ではなく、たゞ詩歌を愛する人に過ぎないと知つてみますと、貴方は或は富者であるかもそれは知れませんが、尤も妾にはどうしてもさうとは思はれませんけれど。なぜなら貴方のお嗜好は貴方の有つていらつしやるものをみんな浪費ささうですもの。よく言ふことですわね、詩人には財産を維持することもできなければ作り出すこともできないつて。』

『いやその言は私には當て嵌らないよ、』と小姓が言つた、『私は詩を作る、しかし私は金持でもなければ貧乏人でもないんだ。そしてそれを感じないで、まにそれに就いてお喋りをする事となしに、かのゼノア人が彼等の招待になすごとく、私は自分の好きな人には一クラウン、時には二クラウンでも與へて腹を痛めないんだ。だから、高貴な眞珠娘、この二度目の詩とその中に包まれたこの二度目の金貨とを納めておくれ、私が詩人であるかさうでないかなどいふ厄介な詮議立てをするのは止めてね。私はたゞお前にかうと信じて貰ひたいだけなんだ、つまりこれをお前に與へる人間はお前に授けるためにはマイダス（希臘神話。フリツアの王、パツカスの養父シレナスを救助した功蹟からパツカスから褒美を望まれて、おのが手に觸れるもの悉くを金に化す）の財寶も喜んで有つだらうといふこととをね。』

プレシオーサはその紙を取つた。だがその内部に金貨を感じると、彼女は言つ

た、『この詩は長生をする見込みがありますわ、なぜなら内部に二つの魂がありますもの、金貨のと、詩のと。そしてそれらは、言ふまでもなく、極り切つて魂と心に充ちてゐますわ。ですがどうぞ御了解下さい、お小姓さん、私はそんなに澤山の魂をほしがつてはゐないといふことをね、また貴方がそれの一つをお納め下さらないやうでしたら、妾はどんな理由があらうと一方のを頂きはしませんといふことをね。妾は貴方が詩人であるから好きなのです、贈物の惠與者として、はありません。それでこそ妾達は何時までもお友達でゐられますわ、なぜなら貴方の金貨の有荷は貴方の詩よりもすつと速かに盡きてしまふでせうから。』

『なるほど、』と小姓が言つた、『そんなに私が貧乏であると言ひ張つてきかないのなら仕方ない、この詩の中でお前に捧げた魂は拒けないでおくれ、ではその金貨は返しておくれ。いやそれにはもうお前の手が觸れたんだから、それは私の生きてゐる

限り神聖な記念物として私の手に残つてゐるんだらうよ。』

プレシオーサは彼に金貨を與へた、そして詩は納めた、だがそれは街中で讀みたくなかつた。小姓はプレシオーサからそんなに愛想よくあしらはれたので、彼女の心を動かしたものと思ひ込んで意氣揚々と去つて行つた。

## 五

今やプレシオーサの目的はアンドリュウの父親の家を探し出すといふにあつたので、彼女はよく知つてゐたその街を差して、何處にも踊りには停らないで眞直に行つた。さうして凡そ途の半分も行つた時、豫めアンドリュウが彼女に陳べてあつた通りの美しく輝いた鐵の張り出しを、そしてそこに五十歳恰好の、氣高い様子をした、胸に赤い勳章を佩びた一人の紳士のゐるのを認めた。その紳士がジブシイ娘を

見ると、大聲を出して呼んだ。

『い、へ登つておいで、娘達、お前達に遣るものがある。』

これらの言葉はほかの三人の紳士を張り出しに引張り出した。その人々の中に混じつて戀に惱めるアンドリュウもゐた。彼がプレシオーサにその眼を投げかけた刹那、彼は顔色を變へた。そして危く卒倒しかけた、彼女の不意の出現が彼に與へた効驗はそれ程だつた。娘達は階段を上つて來た、一方婆さんはアンドリュウのことで召使達に口を開かすために階下にとゞまつた。娘達が室に入ると、年長の紳士が他の人々に話してゐるところだつた、『これがきつとマドリッドで八ヶ間敷く言はれてゐるあの秀麗なジブシイ娘なんだな。』

『それなんです、』とアンドリュウが言つた、『そして彼女は無論これまで見たことのない美しい生物です。』

『皆様がさう仰有いますの』とプレシオーサが言つた、彼女はそこへはいつて來た時にそれらの評言を洩れ聞いたのだつた、『ですけれど、實のところ皆様は半分方も思ひ違ひをなされてゐるに決つてゐますわ。それは妾だつて自分をちよいと可愛らしいぐらゐには思つてゐますの。けれど、皆様の仰有るやうな秀麗——ちつともそんなことはありませんわ!』

『ドン・ジュアニーコの、わしの息子の命にかけて、』と年長の紳士が言つた、『お前は どうしてさうぢやないよ、美しいジブシイ娘。』

『で、そのドン・ジュアニーコと仰有いますのは? 貴方様の御子息様とは?』とプレシオーサが言つた。

『お前の傍にゐるその伊達男さ、』と騎士が言つた。

『ほんにね、妾は貴方様が二歳の小兒の言ふことを真にうけていらつしやつたかと

思ひましたの、』とプレシオーサが言つた、『ドン・ジュアニーコなんて、まるで小さい可愛らしい秘蔵子のやうぢやありませんか！ それがまあ、もうお嫁さんを貰つてもいゝ年頃の方ですもの。そこでこの方の額に現はれた或筋から占つてみますのに、この方は三年経たないうちにきつと結婚なさいますわ、それも大方御自分の好きな方とね、もしもこゝ暫くの間この方に見捨てるやうなこともなく、お心變りもありませんでしたらね。』

『おや、おや、』と仲間の一人が言つた、『このジプシイ娘は皺一つにも意味を讀むことが出来るんだね。』

この間に、プレシオーサと一緒に來た三人のジプシイ娘達は、頭を集めて、お互に囁き合つてゐるのだつた。『ねえ、ちよいと、』とクリステイナが言つた、『あの人は今朝私達に八リアル貨幣を三つくれた紳士よ。』

『えゝ、さうよ、』と他のが言つた、『でもあの方がそれを口に出すまではそのことについて何にも言はずにおきませうよ。あの方はそれを秘密になさらうとしてゐるらしいんだから。』

三人の者がかうして相談をしてゐる傍、プレシオーサは皺に関する今の評言の回答をした。『妾は眼で見らるものを、指でもつて占ひますの。ドン・ジュアニーコ様のことは、筋なしでも、少々色好きで、氣性が烈しくつて、そして性急の方だと判りますの、それから出來さうにないことでもすぐお約束なさる方だとね。神様、この方を欺騙者にして下さいますな、それが何よりも悪いことになりますから。この方はいま長い旅をなさらうとしていらつしやいます、ですが栗毛の馬の考へることゝ、それに鞍おく人間の考へることゝは別々でございます。人間は計畫いたしません、神様がそれを御成敗なさるのでございます。多分この方はオニエズへと思つて

ゐられるでせうけれど、いざ出かけてみるとガギボーアへの途中に御自分を見出すことゝなるでせうよ。』

『如何にも、ヒターナ、』とドン・ジュアンが言つた、『お前は私に關して色々の點で間違なく言ひ當てた。私は確に、神の意志によつて、四五日うちにフランダアズへ出發しようと思つてゐる。尤もお前は私がその道から引返さなければならぬと豫言したが、それでも私は私の目的を阻むやうな如何なる障礙にも起きてもらひたくないのだ。』

『よくわかりました、若紳士様、』とジプシイが答へた、『たゞその身を神様にお托しなさいませ、しますれば萬事がうまく行くのでございませうよ。御安心遊ばせ、妾は今まで申上げて來たことについては何事もちつとも存じて居りませんから。妾が時折的に言ひあてることがありまして、それはちつとも不思議ぢやありません

わ、私は何時も當て途なしに澤山なことを喋り散らすんですもの。妾は貴方様がお宅をお出なさないで、御兩親様と一緒に靜かにこゝでお暮しなされてお兩方の寄る年波を慰めて上げるやうに、うまく貴方様を説きつけようと思つてゐるのでございます。なぜなら妾はフランダアズゆきなぞは好まないからでございます、とりわけ貴方様のやうなまだ乳の香のするお若い方のね。まあ貴方様が今少し御成長なされて、うまく戦ひの勞苦にも耐えることができるやうになりますまでお待ちなさいまし。まして貴方様のお胸のうちに今波立つてゐるいろんな色狂ひのことを考へますると、貴方様はこゝにいらしてもずるぶん戦ひ悩んでいらつしやるんですもの。氣を落ちつけて下さい、氣を落ちつけて下さいな、暴馬さん！ お氣をつけなさい、結婚前のお仕打に。さうしてさあ妾達に、神様と貴方様のお名前に免じて、少々お惠金を下さいね。それは貴方様が善いお生れであると妾は眞實信じてゐます



ので、そしてもしそれと一緒に貴方様が忠實で誠實だといふのでしたら、只今妾の申上げましたことはすつかり的を射貫いたわけになりますのでそのお喜びとして歌をうたひませうから。』

『前に話した通り、』とドン・ジュアン、いやアンドリュウ・カバリーロオが言った、『お前はあらゆる點で正しかつた、但し私がつともすると破約でもしさうな人間であるかのやうにお前が思ひ込んでるやしないかと案じられるこの思ひは別としてね。その點ではお前は確に間違つてゐる。野原で誓つた言葉を町で、いやそれは何處でもいゝが、私は求められるのを待つてゐるに果すのだ。誰だつてさうだらう、假令ひ極僅でも嘘偽の悪徳を許す者は、自分を紳士と見做すことはできないのだと。私の父はお前達に神及び私の名のために施物を與へるだらう。それといふのも私の持つてゐるのは事實今朝みんな或貴婦人方に與へてしまつたから。だが私は彼女達に、彼

女達がその美しいと同程度に親切であるかといふことを、殊にそのうちの一人がさうであるかといふことを、強ひてきかうとはしなかつたのだ。』

これを聞くと、クリステイナがその仲間に言つた『皆さん、憚りながら首を締めてもらつてもいゝわ、もしあの方が今朝妾達にくれた八リーアル三個のことを言つてゐないとすれば。』

『いゝえ、そんな筈はないわよ、』と娘達の一人が言つた、『だつてあの方は貴婦人方と言つたんだもの、妾達のことぢやないわ。それにあの方が御自分をかうだと仰つてゐるやうに眞實ほんとのことしか言へないのなら、このことにしても嘘をつく氣づかひはないわ。』

『でも、さ、』とクリステイナが言つた、『誰にも迷惑をかけることなしに、それを言ふ本人の利益と信用のためにつく嘘なら大した嘘ぢやないわ。まあそんなことはど

うでもい、として、ちよいとあの方は妾達になんにもくれないし、踊らさうともしないのね。』

その時ジブシイ婆さんが室にはいつて来て言つた、『さあ大急ぎだよ、孫娘。もう遅いんだから、それに言ふこと、爲ることどつさりあるんだから。』

『何なのそれは、お祖母さん？』とプレシオーサが言つた、『男の子なの？ 女の子なの？』

『男の子さ！ 素晴らしくい、お子さ。さあお出で、プレシオーサ、びつくりすること聞かしてやるから。』

『産後の苦勞でおふくろさんの生命にかゝはるやうなことになるねばい、わね。』と孫娘が言つた。

『わし達がありつたけのお世話をするのさ。あの方は大變い、お暮しをなさつてゐ

ただだから、できたお子供は全く綺麗だよ。』

『何處かの御婦人がお産をしたかな？』とアンドユリウの父親が訊いた。

『さやうでござりますよ、旦那様、』と老ヒターナが答へた、『でもそれは極の内密事ないしよごとでござりますもんで、プレシオーサと、この私わたくしと、今一人の或方のほか誰一人そのことは知つちやをりません。そんな譯でその御婦人の名前もこゝで申上げるわけにまゐりません、はい。』

『いや、俺達わしたちはそれを知らなくたつてい、』と居合した紳士の一人が言つた、『ただ、お前達の舌に秘密を、お前達の扶助たすけにその名譽を托すやうな婦人に幸あれと願ふだけだ。』

『妾達だつて悪者ばかりぢやありませんわ、』とプレシオーサが答へた、『多分妾達のうちにも一人ぐらゐはこの室の中うちにゐらつしやる最も氣高い方と比べて劣らないだ

けの誠實と信實を有つてゐる者がゐるでせうよ。さあお立ちとしませうよ、お祖母さん、妾達はこゝぢやひどく見くびられてるのよ、事實妾達は泥棒でも乞食でもありはしないのにね。』

『さう腹を立てたもんぢやないよ、プレシオーサ、』とアンドリュウの父親が言つた。『尠くともお前だけにはどんな者だつて悪感を持ちやうないとわしは思つてゐるのだ。それはお前の美しい容貌がお前の美しい行爲を證明してゐるからだ。願はくはみんなと一緒に少し踊つてもらひたいね。わしはこゝにお前に與へようと兩の面のあるダグルーンをもつてゐる、しかしどつちの面もお前のその面ほど美しくはない、尤もこれは二人の王様の面ではあるがな。』

それを聞くが早いか婆さんが叫んだ。『それぞれ、みんな裾を端折つて、紳士様方のお需めに應じるんだよ。』

プレシオーサは羯鼓を手にとつた、そして彼女達はみな極めて優美に自由に踊つた。で、全観客の眼は、殊にアンドリュウのそれは、皆の足つきに釘づけられた。彼は恰も彼の魂全體が彼女に集中されたかの如くに、うつとりとプレシオーサに見惚れてゐた。然るに偶然の厄介な一事件が彼の歡喜をばがらりと苦惱に變へてしまつたのである。

踊りの最中に、ついプレシオーサが小姓から貰つたあの紙を落してしまつた。それは直ちに、ジブシイ達に就いて好ましからぬ意見を抱いてゐた紳士の手拾ひ上げられた。

彼はそれを披いた、そして言つた、『何だらう、これは？ 牧歌かな？ 成程！ 踊りは中止だ、まあ聴き給へ、いや何、僕がこの冒頭から判断したところでは、この詩はどうしてまづい方ぢやないんだ。』

プレシオーサは當惑した、彼女はその詩の内容を知らなかつたからである、で彼女はその紳士にそれを讀まないで、返してくれと乞つた。

ところで、彼女のさうした歎願は却つて益々アンドリュウをしてその文言を聞きながらすことになつた、そこで彼の友人はそれを下の如く讀み上げた――

誰か見し？ プレシオーサの

仙女王のごと踊るを。

日に輝ける川の漣は

彼女の小さき足のごと閃めき、震ふ。

彼女の巧みに羯鼓をうち鳴らす時、

彼女の聲ふるはして歌うたふ時、お、如何にこゝろよき！

眞珠をば眞白き手より彼女は雨降らし。

薔薇色の唇よりは花の滴る。

彼女の髪のひとつ捲毛も

千々の魂を捕へざるなし。

その輝ける眼の一瞥も

けに『愛』の空より來る射撃と思はれざるなし。

この彌高き乙女に拜跪きて彼は、

弓も矢筒も彼女の足下に横へぬ。

『お、神よ！』と讀み手が叫んだ、『これを書いた男は洒落れた詩人だ。』

『その方は詩人ぢやありませんのよ、紳士様、』とプレシオーサが言つた、『お小姓で

すわ、それも大變華美なそして立派な方ですわ。』

『言ふことに氣をつけないか、プレシオーサ、』と一方が言ひ返した。『お前のその小姓に與へる讃辭はアンドリュウの心をぶす／＼突刺す槍となるんだ。それ御覽、彼はハツとなつて尻餅を搦き、椅子にふん反り返つて、毛孔といふ毛孔からは冷たい汗をたら／＼流してゐるぢやないか。娘さん、お前思ひ違ひをしちやいけないよ、彼はちよつとぐらゐお前に輕蔑されても平氣でゐられると言つた程度のお手輕な惚れ方をしちやゐないんだよ。まあ後生だから、彼の耳に何とか言葉を囁いてくれ、そいつを眞直に彼の心に傳へて、彼の氣を元へ戻してもらひたいんだ。いやかういつた牧歌を毎日うけとるがいゝ、すれば結果は正にこの通りだから。』

それは正に彼の言つた通りだつた。アンドリュウはその詩を耳にした時から千の嫉妬に苛まれたのだつた、そして甚く壓倒されたので、それを見かけた彼の父親が

大聲で叫んだ、『どうしたことだ、ドン・ジュアン？ お前はすつかり眞蒼になつて、まるで氣絶をしかけてゐるやうだが。』

『ちよいとお待ち下さいまし、』とプレシオーサが言つた、『妾にこの方の耳へ二言三言囁かして下さいね、しますればこの方は氣絶も何にもなさらないでせうから。』

さう言つて彼女は彼の上に身を屈めて、殆どその唇を動かさないうで言つた、『貴方は勇ましいヒターノの一人となるんですよ！ まあどうしたといふんです、アンドリュウ、こんな紙つきれに負かされるやうで、どうしてあのガアゼの拷問（往時西行はれた拷問の一種、水に浸したがアゼを罪人の口中に押込んで苦しめたものである。）が凌げるんですか？』

それから彼女は彼の胸の上で六遍十字を切つて彼の傍から離れた。するとアンドリュウは暫らくの間呼吸をして、友人達にプレシオーサの言葉に効驗があつたと語つた。

結局、両面のダブルンはブレシオーサに與へられた。と、彼女は仲間の者に、それを小錢に代へて、その高をみんなと公平に分配しようと言つた。

アンドリュウの父親は彼女が息子に話した數語を書き残しておいてくれと彼女に懇願した、彼はそれを是非とも知りたいといふのだつた。彼女はお易い御用だと言つた、そしてそれらはほんのつまらぬ兒戯に思へるかも知れないが、頭痛や眩暈を鎮めるのには無上の効驗があると言つた。その言葉はかうだつた――

馬鹿な奴頭、馬鹿な奴頭、

なんでこんなに騒ぐのじゃ？

蹴躓き、踏み外し、はた迂り倒れ、みな無用！

持ちやれ頼みの確信と、

及び氣ながい辛抱を

そして不斷に、公明正大。

すべて醜い猜疑には

是認を一つも與へるな、

それに容智をひん曲けさすな。

これさへお前がやるならば

お前はちつとも悲しむまい、

素敵なものがやつて來るから、

神様ならびに聖・クリストファ様のお援助たすけにより。

『ただこれだけの言葉を、』と彼女がつづけた、『誰でもい、ですから眩暈をしてゐる

人に言ひ渡しさへしますれば、同時にその人の胸の上で六遍十字をきりましてね、するとその人はちき林檎のやうに達者になりますわ。』

婆さんがその呪文を聞いた時、彼娘は自分の孫娘によつて演じられた巧妙な早業に眼を圓くした、そしてアンドリュウもその全體すべてが彼女の敏捷い機智から出た作り事であると知ると猶更さうだつた。プレシオーサは再びアンドリュウを苦しめまいと、その牧歌を紳士の手に残したまゝで、それを請求しようとしなかつた、なぜなら彼女は、誰も教へないのに、何が戀人に嫉妬の疼痛を感じしめるかといふことを知つてゐたからである。

暇を告げる前に、彼女はドン・ジュアンに言つた、『平日でしたら何時でも、貴方様、旅立に吉でございますよ、どの日をとつても黒星ぢやございません。それゆゑ、できるだけ出發をお急ぎなさいまし。貴方様の前には廣々とした土地や大きなお娯

しみの勝手に得られる生活くらしが横はつてゐますから、もし貴方様がそれに通つうを利かさうとなさいますればね。』

『いや軍人の生活といふのはお前の言ふやうな勝手氣儘なものではなく、』とアンドリュウが答へた、『どちらかと言へば自由より屈服の生活だと私には思はれるのだ。だがまあ、出来るだけのことはやつてみようと思ふよ。』

『取越し苦勞をなさるよりまあおやりなさるのでございますのね、』とプレシオーサが言つた、『しますれば、神様は、その見目美しいお姿に免じて、貴方様をお守護まもら下さる上、仕合せな御身分に導いて下さるでせうから。』

かうした別れの言葉はアンドリュウを喜悅で満した。ヒターナ達もそれに劣らず満足してその場を立ち去り、ダブルーンを彼女達の間に分配した、婆さんは例によつてその半分をとつた、彼女が年長者であるといふところから、及び、彼女達が舞踊

道化、曲藝の廣い海を航するにおいて、その船舵を取るコムバツスだつたからである。

## 六

遂に定められた會合の日が來た。アンドリュウはその朝、賃借りの驃馬に跨つて、従者は一人も連れずに、約束の場所にとやつて來た。見ると、プレシオーサと彼女のお祖母さんが彼を待つてゐたのだつた、彼は彼女達から丁寧に迎へられた。彼は、探索されても發覺されることのないやうにと、眞晝間まっぴらまとならない前、即刻、自分をランチョオ(ジプシイの野營)へ連れて行つてくれと彼女達に乞ふた、單獨にやつて來たことから既に用心をしてゐた二人のヒターナは、直ちに踵くびすを返した。そして間もなく彼を伴つて彼女達の小屋のあるところに到着した。

アンドリュウはその小屋の一つにはいつた、それはランチョオのうちでの一番大きな小屋だつた、其處で彼は直ちに十一二人のヒターノに助力せられた、皆見事な屈強の若者達で、彼等には前以て婆さんが彼等の仲間入りをしようとしてゐる新しい朋輩のことを通告してあつたのだつた。婆さんは彼等に、そのことを秘密にしておけと命する必要はないと思つてゐた、なぜなら、彼等は平素ふだんからそれを類たぐひない怜悯と正確でもつて遵守してゐたからである。

若者達の眼は忽ち驃馬にとまつた。と、彼等のうちの一人が言つた、『こいつを木曜日にトレードで賣るんだぞ。』

『それはならぬ、』とアンドリュウが言つた、『なぜかと言へば、マドリードには、いやその他の何處の町にもだが、苟くも西班牙の土を踏む驃夫にしてこれは知らんといふやうな賃貸驃馬は一頭だつてゐるはしないのだから。』



『お、神様よ、アンドリュウさん。』と黨類の一人が言った。『假令ひその驛馬にこの世の限りを盡したよりも、もつと多くの證據や目標があるとしても、俺達はそいつを巧い工合に變へてみせませう、さうすりあ其奴を産んだおふくろにだつて、其奴の持主だつた旦那にだつて迎も見つかりつこありませんよ。』

『さうでもあらうが、』とアンドリュウが言った。『この度だけは誰も私の勧め通りに爲なければならぬ。この驛馬は殺されて、その骨の見つからない處へ埋められなければならぬ。』

『罪もない生物の命を斷つなんて！』と別のジプシイが叫んだ。『何といふ罪の深い！ そんなことは言はねえで、アンドリュウさん、かういふことに願ひませう。さあその獸物をよつく驗めて下さい、その特徴を何處から何處まですつかり記憶え込んどまひますまでね。したらそいつは私に持つて行かして頂きます、そこで只

今から二時間のうちに、もしも貴方が其奴をそれと再び見別けることができましたなら、私は貴方から逃げ出した黒奴同様に撲り飛ばされてもよろしうございます。』驛馬の殺されるべきを私は何處までも主張して止まない、』とアンドリュウが言った。『假令その變形については信じて疑はないとしてもだ。それが地下に置かれないうちは、私は何時までも發覺されはしないかといふ恐れにあるのだ。もしも君等がそれを賣つて得られる利益を的に異議を唱へるといふのだつたら、私は驛馬四頭の價値よりもつと澤山の金でもつてお仲間入りの渡りをつけよう、私はそれが出來ないほど困窮してこの組合へやつて來はしないのだ。』

『なるほど、アンドリュウ・カバリー・ロオさんがさうまで仰有るなら、』とまた一人のヒターノが言った。『この罪咎もない生物は殺すことにいたしませう、尤もこのことは神かけて私の性には合はないことですがね。なぜなら、口のボツ／＼がまだ除

れてゐないところを見ますと、こいつはまだ若くつて、賃貸驛馬中きつての逸物ですからね。それにその横腹に傷痕もなければ、拍車の跡もないところをもつてすれば、こいつはきつとい、足をもつてゐるに相違ありませんからね。』

驛馬の屠殺は夜に入るまで延ばされた。そしてその日の残りはアンドリュウの入営式に費された、人々は野營の中の一番善い小屋をきれいに掃除して、そこを樹枝や葦でもつて飾り立てた、そしてアンドリュウを其處の栓コルクの樹の切株に着席さし、彼の手に大槌と火箸とを持たして、二つの六絃琴の音に調子を合はして二本のホルト草を斷切らした、その後で彼等は彼の片腕を露出して、それに新らしい絹のリボンをぐる／＼と巻きつけた。そのリボンには短い棒ちぎれが通されてあつた、それを彼等は、罪人の絞殺されるガロート柱に附着せる鐵環に罪人の首を押し込め、みねを締め、死に至らしむるものの流儀にならつて、軽く二遍廻はした。

儀式

プレシオーサはその儀式中つとその場にゐた、同じく他の多くのヒターナ、老いも若いも其處にゐた、彼女達の或者は感嘆の眼を瞠つて、また或者は惚れ／＼とした風に、アンドリュウを凝視した、そのアンドリュウは頗るの上機嫌だつたので、ヒターナ達ですら彼には此上もなく好意をもつてくれたのである。

儀式が終ると、一人のジブジ爺爺さんがプレシオーサの手をとつて、アンドリュウの前に坐らし、斯く語つた。

『この娘を、これは西班牙に住むヒターナのうちに、美人といふ美人中の花で粹ぢやが、わし達は貴方の妻かみにでも情婦こゝろにでもして上げるのぢや、その邊はどつちなりと貴方の好通りすきごうにして一向差支へないのぢや、由來わし達の手輕で氣儘くらしな生活には、小むつかしい遠慮氣兼や儀式づくめは通用しないからな。まあこの娘こを十分に驗あたらめて見るがよい、そしてこの娘が貴方の氣あたまに入るかどうか、それともこの娘こに何處か

貴方あんだの好かぬ點があるかどうか考へて見るのぢや。そこでもしもこの娘こに貴方あんだの好かぬ點があつたら、こゝに列んでゐる娘達のうちから、どれでも貴方あんだの一番好きなどと思ふ娘こを一人選みなされ、その娘こを貴方あんだのものにして上げるのぢやから。したがこゝのところが肝心ぢや、それは一旦これと誰かを選んだら、もう二度とそいつを別の者に見代へてはならぬ、乃至他人ひとの女房達にも娘達にも手を出してはならぬといふことぢや。わし達は親睦かたての法規かたてには何處までも背かぬ者ぢや、それゆゑ、わし達の中には誰一人として他人のもつてゐる實に思ひを焦がす者はないのぢや、わし達は嫉妬といふ辛い疫病から逃れて、安全に自由に生きてゐる者ぢや、それで、わし達の間には親族相姦イシセキストは別に珍らしいことではないが、密通といつたものは一つもないのぢや。もしも誰かの妻か情婦が不埒なことをした場合には、そいつを罰するためわし達は裁判所へ訴へ出るなどいふことはせず、わし達自身でその妻や

情婦の裁判官となり處刑者となるのぢや。そしてそいつ等を山中とか人里離れた野原とかでもつて、毒蟲かなんどのやうに平氣の平左で殺したり埋めたりするのぢや、さうした者に向かつて復讐をしようとする親類は一人もなく、そいつ等の死についてわし達に文句をならべようといふ親達も一人だつてありはせぬ。この懸念と恐怖から、こゝの女達は皆身持正しくしてゐなければならぬと常住考へてゐるのぢや。そこで、わし達は、今も言ふ通り、こゝの女達の貞操まもつについては何の心配も抱いちやらないのぢや。

『こゝにまたわし達誰も彼もに一樣とは行かぬ二三の件がある、もつともこいつは妻や情婦共の知つたことぢやないがの、いや、妻や情婦の方はそれ〴〵運命が割り當ててくれたその男にだけくつついてをればそれでよいのぢやから。何さ、わし達の間にも離縁沙汰は持ち上るといふことさ。一方が死んだり、年をとつたりするからな。

男なら誰でも若し何なら、自分にとつて年とり過ぎた女を去つて、もつと年齢にふさはしいものを選んでよいのぢや。かう言つた、またその他の法規や律令によつて、わし達は楽しい生活を送らうと計画んでゐるのぢや。わし達は、原野や、田畑や、森や、山や、泉や、川の君主なのぢや。山は無代でもつて薪を、果樹園は果實を、葡萄園は葡萄を、農園は野菜を、泉は水を、川は魚を、獵園は羽の生えた獲物をわし達に與へてくれるのぢや。また岩は蔭を、樹の間や谷間は新らしい空気を、洞穴は隠れ所を與へてくれるのぢや。わし達には、天候の險惡は詩で謂ふソヨで、雪は清涼濟で、雨は浴みで、雷は音楽で、稻妻は松火ぢや。わし達には固い大地が羽蒲團で、わし達の身體の鞣された皮膚は身を守る鐵壁の鎧で、わし達のすばしい四肢は鐵の屏や濠や壁の障礙をもともせぬし、わし達の勇氣は繩で絞められ、ガアゼで咽を詰められ、拷問で殺められようとも、わし達から引つこ抜かれるがものぢやない。

『諾と否の間』にわし達は、その二つを混同にした方が便利ぢやと思ふ時にはちつとも區別をせぬ。わし達はいつもこの身が懺悔人であるよか殉教者である方を誇りとしてゐるのぢや。わし達のために牛馬は野原で飼はれる、そこで衣囊は市中で充たされるのぢや。如何な驚でも他の猛禽でも、わし達が獲物の得られる機會を攫まへるほど速かにその餌食に飛びかゝりはせぬ。さうしてつまり、わし達は末安樂が望まれる多くの資格を得ること、なるのぢや。といふのも牢舎の中で歌をうたふわし達は拷問臺で口を嚙み、晝間は働き、夜となれば竊盜をする、いや寧ろそれは世の人々に自分の財産を何處へ藏はうかなど、其場所を捜す手数を省いた方がよい、といふことを教へてやるのぢや。わし達は面目を失くしはしまいかといふ心配に苦められもせぬし、それを増さうといふ野心に二六時中搖起されもせぬ。わし達はどの

派にも屬してをらぬ、ぢやから御起床謁見に出席したり記念日に參列したりするために、或はお大盡の行列に景氣を添へるために、または御愛寵を乞ふために、夜明け早々からはね起きはせぬのぢや。わし達の綺羅を飾つたお屋根や數寄を凝した宮殿といふのは、この輕便な小屋なのぢや。わし達のフランダズ流の繪畫や風景といふのは、峨々たる斷崖や白雪を戴く山の峰や、廣々とした牧場や木葉茂つた小森やの至る處で、自然がわし達の眼に與へてくれるそれなのぢや。わし達は野育ちの天文學者なのぢや。それは殆ど何時でも露天の下で眠るところから、夜でも晝間でも何時々と言ひ當てることができるからな。わし達にはどんな風にオーロラ(暁の女神)が  
大空から許多の星を掻き消し、掃き落すか、またはどんな風に彼女がその連れと一緒に  
なつて空氣を生きくさし、水を爽快にし、大地を潤はして、ほのくくと曉に  
あらはれるかよくわかるのぢや。さて彼女が現はれると、詩人の歌ふ通り、陽

が高地を金色に輝かし、山々を微笑ますとなるのぢや。わし達はそいつの光線が斜に落ちかゝる時、その缺乏によつて肌寒い目に遇はされようとも、またそれが頭の眞上から照りつけてぢりく身を焙られようとも恐れはせぬのぢや。わし達は日にも霜にも、不足にも豊富にも同じ面貌を向けるのぢや。詰まる所わし達は、諺に謂ふ「お寺か、海か、王の眷族か」といふことに身を煩はさないで、丹精と機智でもつて生活してゐる民族なのぢや。わし達は欲するものすべてを得てをる、なぜなら現に得てゐるもので満足してゐるのぢやからな。

『さて、氣前のよい若い方、かうして貴方に話したことは、貴方がもうはいつたこの生活に、そしてこれから貴方がそいつをやらなければならぬ風習慣例に明るくなるやうにと、へざつと見取圖を畫いたわけのものぢや。なほ他の多くの細目は、これとて同様に重んじる價值はあるのぢやが、行くく自分で知つて來るのぢやら』

うよ。』

茲に於て能辯な老ヒターノはその談話を結んだ。新參者は、さうした奇特な律令と近づきになつたことから吾身を大變祝してゐるといふこと、及びさうして道理と思慮深い原則に基礎を置いた制度の下に生活するのをあこがれてゐるといふこと、たゞ一つの遺憾に思ふのはかうした愉快な生活を知るのが遅かつたといふこと、そしてたつた今から彼は自分の士爵や、世に知られた血統に對する空しき榮譽やをさらりと振棄て、それらを奴役の下に、いやその下に彼等が住んでゐる所の法規の下に置いた、といふのも彼がそのために澤山の金貨や宏大なる帝土を放棄した——寧ろ彼女のためにのみ彼はそれらを思慕する氣になつたのだが——その神聖なブレシオーサを彼に授けたといふことによつて、彼が進んで彼等に仕へなければならぬといつた心持に彼等がさうまで見事に酬いてくれたからであるといふことを答へ

た。

その次にブレシオーサが語つた。

『さて、妾共の立法者である、この方々が、』と彼女は言つた。『その法規に従つて、妾は貴方様のものとならなければならぬとお決め下され、御覽の通り妾の身は貴方様に差上げましたからには、妾も、妾自身の意志の法規——それは何者にも勝つて一番強いものでございますが——その意志の法規に従ひまして只今判決いたしましたのでございます、それは妾達二人の間に協定されましたあの諸條件を外ほかにして妾は斷じて貴方様のものとはならないといふことでございます。貴方様は妾を享樂する前に二年間、妾共と仲間暮しをしなければなりません、しますれば貴方様も一時の出來心に後悔なさるやうなこと、ならず、また妾も早合點に欺かれるやうなこと、とならないのでございませうから。境遇は法規に勝つてゐます、妾のお話申し上

けたことは貴方様も御承知でございます、もしも貴方様がそれをお守りなさるやうでしたら、妾は貴方様のもの、貴方様は妾のものとなるのでございませう、もしもそれをお守りなさらないやうでしたら、驟馬は殺されず、貴方様の衣服は元通りで貴方様のお金は一ドイツ(和蘭往時)  
の小銅貨だつて失くされません。貴方様がお宅を出なすつてからまだまる一日と経つちやるません、今の間にどうなさつた方が貴方様に一番よろしいかよくお考へ下さいまし。この方々には貴方様に妾の肉體を差上げることはできませんが、妾の魂までさうする譯に参りません、魂は自由なのでございませう、自由に生れつき、なほ何時までも自由でなければなりません。もしも貴方様がこゝにお留まりなさるとならば、妾は貴方様を此上もなく尊重するのでございませう、またよし貴方様がこゝをお去りなさらうとも、妾は同様に貴方様を尊重するのでございませう、なぜなら妾は色戀の出來心といふものは、それが分別や脱迷の力に

よつて休息のところへ持つて行かれるそれまでは、弛い手綱でもつて駈けてゐるといふ意見を抱いてゐるからでございます。妾は貴方様が獵師のやうな態度で妾に向つて來るのを望まないのでございます、獵師といふものは、一疋の兎を袋へ入れてしまふと、その事はもう忘れてしまつて、また別のを驅逐するのでございます。眼は往々欺かれます、最初の一瞥には金箔物メツキも金に見えます、ですけれどももうすぐ眞物と虚金との間に區別を見分けるのでございます、この妾にある美にしましてもそれを貴方様は妾がもつてゐると仰有り、太陽の上越してまでも崇め、また黄金よりももつと貴重であるとも申立て、をられますが、もしもつと近寄つて眺めてみるとそれが貴方様には蔭となり、験べてみると卑しい金屬に過ぎないといふことになりはしないものでございませうか？ 妾は貴方様に、そこで探るがい、か棄てるがい、かを十分に思案思考するための二年の月日を差上げるのでございます。貴方様

は一生涯身につけて離すことのない寶石を購ふのでございます、その前に當つて念入りにそれを試験して、その價値の眞偽を確めなければなりません。妾はこゝにゐる妾の血屬の人々が、おのが機嫌に任せて、その妻を見捨てたり懲罰したりしようとして勝手に拵へた野蠻な許可には賛成してをりません、と言つて妾は罰を喰ふやうなことは何もいたしたくありませんので、吾夫としては自分勝手なむら氣から妾を見棄てるやうな人間を持ちたくないでございます。』

『それに違ひないのだ、プレシオーサ、』とアンドリュウが言つた、『そこでもしも、あの條件から一點も背かないといふ私の誓ひで、お前の不安を鎮めお前の疑惑を拂ひ除けることが私に出来るといふのだつたら、私の執る誓言の如何なる形式でも、または私がお前に與へるその他の如何なる誓約でも選んでおくれ、すれば私はそつくりお前の望む通りにそれをするつもりだから。』

『囚はれ人が自由を得ようと思つてする誓言や約束は、その者が自由な身となれば十中八九まで果されないものでございます、』とプレシオーサが言ひ返した、『思ひますのに、戀人の場合もそれとそつくり同じでございますわ、彼等は吾思ひを遂げようために、マアキュリーの翼でも、ジョーヴの雷電でも約束しようといふのですもの、實のところさる詩人が妾を捉まへて同様の約束をし、それを三途の川でもつて誓ひましたのですよ。アンドリュウさん、妾には約束も誓言も要りません、萬事は修業の結果に任しておきませうよ。そこで妾のこれからの仕事は、何時なりと貴方が妾に嫌氣のさすやうなことになりますれば、この身の始末をするといふことではございますわ。』

『ではそれでいゝ、』とアンドリュウが言つた、『ところでこの先輩達や、私の仲間達にしなければならぬ一つのお願ひがある、他の事でもないがこゝ、一ヶ月かそこら



の間は私に何も盗まさないやうにしてもらひたいといふことだ、それは私を一個の盗人に仕立てるにはよほど澤山の教課が要るだらうと思はれるから。』

『いや要らぬ心配ぢや、わしの倅、』とジブシイ爺さんが言つた、『わし達は旨いやり方でもつて貴方がこの道での驚になるやうに仕込んでやるつもりぢや、さて貴方がそれを覚え込んだちまふとなると、そいつが馬鹿に好きになつて、その手まで食はうとしなさるのぢや、そいつの後ぢやひどくむづ痒くなるからな。さうぢや、朝は空手で出かけて行つて、晩には積荷でランチョオへ歸つて來るといふことは素敵に面白いことなのぢや。』

『私は答打たれて歸つて來る者を見かけたことがあるのです。』とアンドリュウが言つた。

『足を濡らさないで罎を捉まへることは出來ないことぢや、』と老人が答へた、『この

生活は一から十まで冒険づくぢやよ、泥棒の所業には潜刑船(罪人がその刑罰として)ぢやとか、昔打ちやとか、首繩の痕ぢやとかはつきものなのぢや、一方の船が暴風雨がくらはうが、漏れ口を拵へようが、それで他の船が航海を止めようとはしなからな。戦争が人や馬を殺すといふので、誰も軍人になり手がなかつたら文句はないのぢや。それに、裁判官お手づからの答打はわし達にとつて名譽ある飾章(カザリ)なのぢや、そしてそいつは胸につけるよりも肩につけた方がもつと名譽なことになるのぢや、肝心なことは若い時分に絞罪にひつか、らないやうにするといふことぢや、殊に初犯のためにな。なあに、肩の埃を敲き落されたり、潜刑船で水を跳飛ばしたりすることぐらゐは、胡桃の殻ほどにも氣にしないのぢや、まあ當分の間は、なあアンドリュウ、わしの羽翼(はたけ)のかけの巢の中におつとしてゐるのぢや、よい時分には、飛ばしに連れ出してやる、しかも獲物なしでは歸つて來ないといふ處へぢや、そし

てつまるところ、程なく貴方も一稼ぎ毎に指を舐めだすやうなことになるのぢやらうよ。』

『では兎も角、』とアンドリュウが言つた、『私に與へてくれるその休暇中に私が盗んで來るもの、代として、ランチョオにゐる全部の人々に金貨二百クラウンを分配すること、しよう。』

その言葉が彼の口から出るや否や、多くのヒターノは彼を引抱へて、彼等の肩に載せ、『アンドリュウ大人萬歳、そのまた愛人プレシオーサ萬歳!』と喚きながら、彼を擔いでまはつた。ヒターノ達も同様のことをプレシオーサにした、それはクリステイナを始め、その場に居合はせたその他のジブシイ娘達の妬み心をそ、らないでゐなかつた、なぜなら妬み心といふものは、野蠻人の天幕テントのうちにも、牧人の小屋のうちにも、または王侯の宮殿にも均しく住まうてゐるからである、つまり自分

よりは格別勝れてもゐないと思はれる者が榮達するを眼にするのは、吾身が大變窮痒くなつてくるからである。

それを濟ますと、人々は鱈腹食事をして、貴物の金を公平に分配し、アンドリュウに對する讃辭を繰返し、プレシオーサの美を九天へまで高めた。夜が落ちると、彼等は驛馬の首を切り、そしてそのせいで自分が發覺されるやうなことになるはしないかといふアンドリュウの懸念をすっかりなくするために、そいつを埋めた、猶亦彼等はそのいつと一緒に、その人間の所有した主なる飾物はその身につけて墓の中に埋められるといふ印度人の流儀にならつて、飾り馬具や、鞍や、手綱轡や、腹帶やそのほかすつかりのものを埋めてしまつた。

アンドリュウはさうして見聞して來た總てに尠からず愕いてゐた、そこで彼はその新らしい夥伴たぐいまの慣例には少しも抵觸することなしに、爲し得べき範圍内で、自分

の計畫を遂行しようと決心した。中でも不正の行爲となれば、自分の財布を投げ出して、彼等と行動を共にすまいと思つた。

翌日になると、アンドリュウはジプシー達に、野營を疊んでマドリードから遠くへ移轉するやうにと乞ふた、もし彼がなほそこに停まつてゐたら見つけられるにきまつてゐると思つたからである。人々は彼に、疾くからトレードの山に行き、そして其處から四周の地方を歩きまはつて、そこらの住民に寄附をねだらうといふことに皆が腹を決めてゐたところだと告げた。その通り彼等は天幕を巻き下ろして、出發した、アンドリュウには乗用の驢馬を提供した、だが彼は徒歩で旅し、從者の如くにプレシオーサに仕へた方がいゝと言つた、そこでプレシオーサは伊達從者を手に入れて、意氣揚々と別の驢馬に跨つた、一方アンドリュウも吾思ひのまゝに情婦となし果せた彼女の身近くに自分を見出して同様に嬉しがつた。

107

おゝ、悲痛にして甘い神と呼ばれてゐる——それは吾人の怠惰と弱點とが彼に與へた稱號であるが——其者の有つ強い力よ、如何に汝は旨々と吾人を奴隸に爲すことぞ！ けに、騎士であり、秀でた資質の若者であり、宮廷で育て上げられ、そして氣高い兩親に何不自由なく養はれた、アンドリュウであつた、然るに昨日以來彼の心に斯かる變化が書き込まれようとは！ 即ち彼は召使や友人達を欺き、兩親の望みを挫き、其處で彼の勇氣を振ひ家門の譽をあけるべきだつたフランダアズへの途を見捨て、なるほど世にも勝れて美しいには違ひないが、高がジプシーに過ぎない者の從僕にならうとて、一少女の足下に平伏したのだ！ 驚くべき美の特權、それは如何なる強い意志をも、それが極力抵抗するにも拘らず、その足下に打倒すのである！

四日間の行進で、ジブシイ達はトレードから二リーグ（一リーグ、吾）と離れてゐない、或氣持のいい、村に到着した、其處で彼等はまづその地方のアルカルデ（西班牙の法官）に、彼の領地内では何物も盗みはしない、且つその他人々の迷惑になるやうなことは一切はしないといふ抵當として、幾かの銀製の物品を與へた後で、野營を張つた。これが濟むと、年老つたヒターナ達は皆、若いヒターナも四五人、それに男子達も加はつて、そこら中へ遍く野營地から四五リーグのところを範圍に各自散らばつて行つた。アンドリュウも窃盜の第一課を學ぶために彼等と同行した、だが彼等がその遠征で、多くのことを彼に指南したに拘らず、彼はそれらから二つも得るところがなかつた。反對に、温和な性質の人間には當然の事で、彼の師匠達

の手で行はれる窃盜が却つて彼の心を苦しめた、それで時々彼は掠奪された貧しい人々の涙に動かされては、自分の衣囊ポケットから彼等に償ひをしてやつた。ジブシイ達はこの舉動を見て絶望した、彼等は言つた、その舉動は彼等の律令規則に違背したものである、彼等の律令規則には、彼等の心中に憐憫の情を起すを禁じてあるのだ、なぜなら彼等が少しでもその情を起すとすれば當然窃盜は止さなければならぬことになる、——どの點から考へてもそれは思ひも寄らないことなのだ。こゝに於て、アンドリュウは、自分獨りで盗みに行かう、自分は危険から逃れるのに十分敏捷であり、且つそれを迎へ撃つ勇氣にも缺けてゐないから、すれば自分の窃盜に對する賞罰は自分自身の行爲にだけ限られるだらうからと言つた。

ジブシイ達は彼に、攻撃にも防禦にも、仲間の必要な場合が起きまいものでない、それに單獨行動では迎へも十分な獲物はせしめられないからと説いて、彼の殊勝な志

向を思ひ止まらさうと努めた。しかし彼等が千萬言を費しても、アンドリリュウの決心は動かかなかつた、彼の意は仲間から離れて、自分が盗んだのだと言へさうなものを金で購ひ、斯くして自分の良心を出来るだけ煩はすまいといふのであつた。さうしたやり方を續けて彼は、一ト月足らずのうちに、その道に於ける最も熟達した盗人の四人分以上にも當る獲得を仲間に齎すやうになつた。プレシオーサは自分のいとしい戀人がそれほどまでに機敏な、働きのある盗人となつたのを見て尠からず悦んだ、とは言ふもの、彼女は、もし彼が遣害やりそこなひでもしたらとそれを心しんから恐れた、そしてヴェニスヴェニスの全財寶に代へても裁判官の手にかゝる彼を見たくないと思つた、彼の許多の忠勤ぶりや贈物の返禮として、彼女が抱かすにゐられなかつた彼に對する好感はそれほどだつた、約一ヶ月間トレード地方に留まり、其處で豊かな收穫を得た後で、ジブシイ達はエストランマヂユラの有福な地方にと這入つて行つた。

間もなくアンドリリュウはプレシオーサと、名譽を傷けない範圍で情愛のこもつた談話を交へるやうになつた、彼女は彼の善良な性質にだん／＼心を惹かれて來た、同様に、一方彼女に對する彼の愛も、もしまだ餘地があるとしたら、なほ増して行つた、わがプレシオーサの貞淑と、美と分別とはさういつた程だつた。

ジブシイ達が運動競技をやるとなると何時でも、競走や高飛の賞品をアンドリリュウが持ち去つた、彼は九柱戯や球を見事に演つた、そして無比の膂力と巧妙でもつて棒バトを投げた、瞬くうちに彼の名聲はエストランマヂユラ中に擴がつた、そしてその地方では至る處、機敏なジブシイの若者アンドリリュウのこと、彼の優美と藝能のことを口にしなない者がないうやうになつた。彼の名聲が擴がつて行くにつれて、プレシオーサのそれも擴がつて行つた、そして彼等の招かれない町や、村や、村落は一つもなかつた、其處で彼等はその氏神祭やその他の祭禮を賑はすのだつた。その結

果その種族は富み、榮え、満ちて来た、そして戀人達はお互に眼と眼を見交はずだ  
けで幸福だった。

或夜のことだった、往還から少し離れて、常緑の櫛の幾本か立つてゐる間に野營  
の張られてゐた時、人々は彼等の犬が中央見張の邊りで何時になく烈しく吠え立て  
るのを耳にした。アンドリュウほか四五人の者は何事だらうと思つて起き上つた、  
行つて見ると白衣を身に着けた一人の男が、數匹の犬を相手に格闘してゐるのだつ  
た、そのうちに一匹の犬が男の片足を掴まへた。

『如何いふ見でお前こんな處へやつて来たんだえ、おい、』とその男を救つた後で、  
ジブシイの一人が言つた、『こんな時間に、往還から離れてよ、泥棒しに来たのかえッ  
それなら、飛んだお門違ひだ。』

『私は泥棒しに来たのではないのです、それにこゝが往還から離れてゐるからない

かそんなこともまるで知りません、たゞ道に踏み迷つたといふことだけは確かだ  
す、』と傷づいた男が言つた。『だが皆さん、何處かこゝらに一ト晩泊めて頂けるやう  
な、そしてこの犬にやられた傷の手當をして貰へるやうな旅館か或は接待の場所  
もありませんでせうか？』

『こゝらには君を案内するやうな旅館も收容所もありはしないが、』とアンドリュウ  
が答えた、『一夜の宿、傷の手當をするぐらゐることなら、僕等のランチョオで間に  
合ふだらう、さあ一緒に來給へ、いや何、僕等はジブシイに違ひないが、人情には  
缺けてゐないからね。』

『有難いことです！』と男が言つた、『何處でもいゝですから連れて行つて下さい、  
足がひどく疼むんですから。』

アンドリュウは彼を擔ぎ上げた、そして他の同情してゐたジブシイ達の手を借り

てそれを運んで行つた、思へば友人達の間にすら敵よりも一層邪悪な者があり、多くの悪人達のうちにも諸君は善良な一人を見出すであらう。

その夜は分明さつぱかに月の照り渡つた夜であつた、で、人々はさうして運んで行く人間が秀麗な容姿の若者であるといふことを認めることができた。彼は身體中すつかり眞白な亞麻布リネンに包括くわくまつてゐた、そして腰の周圍にも同じ材料で出来てゐる上著うはぎ様のものを巻きつけてゐた。彼等がアンドリュウの小屋といふより假小屋に到着すると、手早く火を焚きつけて、若者の傷に手當をさすためプレシオーサのお祖母さんと呼んで来た。婆さんは犬の毛を少々とつて、それを油で揚げ、患者の左足に見出した二つの咬傷を酒で洗つた後で、そこへその毛と油をつけて、なほそれに少量の嘔み碎いた緑の迷迭香マンチンローウをかぶせた。さうしておいて清潔きんじやくいな繃帯でもつてその足を丁寧に捲き上げた、そしてその上で十字を切つて、言つた、『さあこれでお休みなさいよ、お陰様でまあ大しはこともないぢやらう。』

人々がせつせと傷づいた男の世話をしてゐた時、プレシオーサは傍に立つて、如何にもこれは妙だといつた風の眼をその男に投じた、男の方も同様の仕向けを彼女にした、果てはアンドリュウがその男の熱心な注視に心を留めるやうになつた、しかし彼はそれをプレシオーサの當然萬人の眼を惹かないではおかぬ格段な美しさのせいだとした、さうして遂に、若者にしてやるだけのことをしてしまふと、彼等は彼の行路やその他の事情に就てはその場で訊ねようとしないうで、乾いた藁の寢床の上に彼を獨り残して去つた。

皆の者が行つてしまふのを待ちかねて、プレシオーサがアンドリュウを側わきへ呼んで、言つた、『アンドリュウ、貴方は記憶えていらつしやるの、それ妻が貴方のお宅で仲間と一緒に踊つてゐた時、ふいと紙をとり落したことを？　そしてそれが、あ

の貴方のお氣に可なりさはつたことを？」

『よく記憶えてゐるよ、』とアンドリュウが言つた、『あれはお前のことを讚美した牧歌だつた、そしてまた決して拙いもんぢやなかつた。』

『では申しませんがね、アンドリュウ、實はその詩を書いたといふのは別人ではございませんの、只今彼處へ残して來たあの傷ついた若者がそれなのですの。決して間違つてゐませんわ、なぜならあの人はマドリッドで二三度妾に口をきき、大變い、ロオマンスマでくれたんですもの。でもその時には、確か、お小姓のやうな扮装でしたが——それも並普通のお小姓とちがつて、王様か何かのお氣に入りといつたやうなね。いえ、アンドリュウ、あの人はきつと頭腦の勝れた餘程育ちのいい、若者ですわ、それにしても、どうしたわけでこんな處へ、またあんな服装をしてやつて來たのでせうね。』

『何のそれがお前にわからない事か、プレシオーサ、この私をヒターノとしたその同じ力があの男にあつた粉屋のやうな衣服を着せ、お前を捜しにやつて來させたのだ。お、プレシオーサ！ プレシオーサ！ お前のその崇拜者澤山といふことを私に見せつける心がいよく、明かになつて來たぞ、よし、それなら、私の方から先づ片附けてくれ、その後で向ふをやつつけるのだ、だが双方一時にお前の不實の犠牲にはしてくれな。』

『まあ、アンドリュウ、貴方は何て氣の早い方です！ 何かと言へばもう直ぐそのお心へ残忍な嫉妬の刃を突刺すなんて、貴方もするぶん織弱い絲へ、御自分の望みや妾の面目を引懸けていらつしやるのね。さあ仰有つて下さい、アンドリュウ、假りにもこの場合少しでも細工や瞞着がありましたなら、その若者のことは口へ出さず、その男をば一切知らぬものとしてしまふことが妾に出來なかつたものでせうか



？この妾は、自分の正直なことや立派な振舞に就て、わざわざ貴方に疑惑を抱かせるやうなことまで喋らないでゐられない程のお馬鹿なのでございますか？ 後生ですから、静かにして下さいね、アンドリュウ、そして明日になつて、貴方をさうして心配させる者から、彼が何處へ行くのか、また何でこんな處へ来たのかといふことを絞り出すやうにして下さいね、恐らく貴方の疑ひは間違つてゐるでせうから、と言つて妾の今言つたことに間違ひはありませんけれどね、さてそれから貴方のお氣に召すやうに——妾の身は貴方のお氣に召すやうなことさへすればいゝといふ場にゐますので——その若者のこゝへ来た理由は何だつて構はないですから、即座に追ひやつて下さいね。仲間の者等はみんな貴方に服してゐますから、貴方のお氣に逆らつてまであの人をこゝへ置かうとする者は一人もありませんわ。萬に一つ兎や角言ふとしましても、妾の此身は何處々々までも貴方のものですから、何なら、

あの人から、いえその他貴方が妾の姿を見せたくないと思ふ何人の眼からも、妾の姿を隠してもらひませうよ。この通り、アンドリュウ、妾は貴方が嫉妬するのをちつとも氣にしちやるませんわ、たゞ貴方の妾を信じて下さらないのがほんとに嫌なことですわ。』

『まあ私を狂人だとしてしまふほかに、プレシオーサ、』とアンドリュウが言つた、  
『どんなに説明したつて、逆もく、死物狂ひの、滅茶苦茶嫉妬が一人の男の心持をどんなものにするかお前にわからすことは出来ないよ。だが、それはそれでお前の言つた通りをしよう、そのお小姓詩人先生が何を欲してゐるか、何處へ行くところか、また誰を捜してゐるのか糺明して見よう、すれば、うっかりあの男が、私を狙つてかけに來たと思はれる畏をすつかり見露はすことのできるやうな縁の端緒を、私に掴ますこと、なるかも知れないから。』

『ほんとに嫉妬といふものは』とプレシオーサが言つた、『物事をありのまま、に見せないものですわね、何時も廓大鏡でもつて物を見る、だから土龍丘ちりゅうが山に見えたり、根もない疑ひが眞實ほんまのことに思はれたりするのですわ、どうぞ、アンドリュウ、お願ひですから、このことでは、お互の利害にか、はることですから、十分に思慮をめぐらして、慎重な處置をとつて下さいね、それでこそ、貴方は上の上まで正直で、實直で眞實であるといふ表章しょうしを妾に下さることになりますわ。』

さう言ひながら彼女は、傷ついた男の告白を得ようため、早く夜の明けかしといらしくして心中數限りない様々な推測に悩められてゐるアンドリュウを其處に残して、その場を立去つた。アンドリュウにはどうしてもその小姓がプレシオーサの美に惹きつけられて此處へ來たのだとしか信じられなかつた、なぜなら盜人ぬすびとにはすべての人間が自分自身のやうなものだと信じられるからである、だが一方、プレシオ

ーサの自ら進んで彼に爲した言質は頗る申分のないものに思はれた、その點から言へば、彼は心を全然易きに置き、何も言はずに吾幸福のすべてを彼女がその誓ひを守るに任すべきだつた。

遂に夜が明けた、アンドリュウは傷ついた男の許へ行つた、そして身體の工合はどうか、傷が痛みはしなかつたかと訊ねた後で、お前の名前は何といふ、何處へ行くとところだ、またどういふわけであんなに夜遅く、しかも往還を遠く離れて歩いてゐたのだと尋ねた。若者は、身體の工合はずつと快い、もうちつとも痛みを感じない、だから旅を續けることができると答へた。彼の名前はアロンゾオ・ハアタードオだつた、彼はさる用件を帯びて、ペーニヤ・ド・フランシーアの女主人の許へ行つてゐるところだつた、彼は道を功程はつどらすために夜分歩いた、そして道を間違へて、つい野營地にぶつかり、そこを守つてゐた許多の犬に惱められたといふのだつ

た。

アンドリュウには何としてもそれが眞直な陳述と受けとれなかつた、彼の疑惑は再び彼を苦しめた、そこで、彼は言つた。

『なあ、おい、假りに僕を裁判官として、君に今したやうな訊問を必要とする何かの嫌疑の下に君が僕の目の前へ引張り出されたものだつたとしたら、君のいまの解答は厭でも僕に拵指絞め(拵指を絞めつけて苦)の拷問をさせてゐたんだよ。君が何者だらうか、君の名前が何と言はうが、或はまた君がいま何處へ行つてゐるところだらうが、そんなことは僕にとつてなんでもないんだ、いや、僕だから言つてやるが、もし君がこの旅行について嘘をついた方が都合い、といふなら、もつと眞實らしい嘘をつき給へ。君はラ・ペーニャ・ド・フランシエへ行つてゐるところだと言ふが、それはもう此處から右手三十リーグの餘も後ろとなつてゐるぢやないか。ふむ、道

を功程はかばからすために夜分歩く、そして往還を去る、それから轉じて人跡稀れなる藪や森に入込むかね？ え、おい、兄弟、もつと旨く嘘のつけるやうに稽古し給へ、それから何とでも好きな通りに言つてくれ給へ、お願いだ。ところでかうして君に適宜な忠告をしてやつたお禮として、一つだけ眞實のことを明してもらへないものかね？ 何、もう君が嘘をつくことにかけてはとつとの下手だらうと、いや下手であると僕にはよくわかつてゐる、そこで、どうだね、君は僕が首都で度々見かけたことのある、あの小姓とも紳士ともつかないやうな風をしてゐた男ぢやないかね？ 大詩人といふ評判をとつた男さ、そして先立せんたつてマドリードあたりへちよい／＼現はれて、絶世の美人といふで有名だつた或ジブシイ娘のことをロオマンヌや短詩に作つた男さ。明し給へ、ジブシイ紳士の名譽にかけて、僕は約束する、君の望みとあればどんな事だつて秘密にしておくよ。さあどうだね、いくら君が、自分はその

男ぢやないと言つたところで、僕は承知しないよ、僕の眼の前にあるその顔は僕がマドリッドで見たのと寸分異つてゐないからね。君の才能についての名聲は、世にも秀でた人間として君を熟々眺めるために一再ならず僕の歩を停まらせたのだ、だからこそ君の姿は頗る強く僕の記憶に印せられてゐるのだ、尤も君のその服装は僕が以前見た時のそれとは大變かはつてゐるがね、いや、心配し給ふな、元氣を出し給へ、賊徒の手に陥つたなど、思つてはいけないよ、却つて總ての世間事から守護され保護される養育院へでもはいつて來たと思ひ給へ。そこで僕にちよつと思ひ當ることがある、そしてそれが僕の推測通りだとしたら、君は他の誰よりも僕に會つて合せたつたのだ。僕の推測するところでは、プレシオーサに——それ君が詩を送つた、あの若い美しいジブシイに——戀をして、君はあの女を搜して來たのだ、それがために僕は露程も君に悪感をもちはしない、却つてその正反對だ、なるほど

僕はジブシイには違ひないが、經驗といふものが僕に、戀の強い力の如何なるところまで及ぶかを、またそれがその支配管轄の下に引張り込んだ人々に如何なる變化を蒙らすかを示してくれてゐるのだ。もしさういふわけだとしたら、いや僕はきつとそれにちがひないと思ふんだが、その美しいジブシイ娘はこゝにゐるのだ。』

『さうです、ゐます、私は彼女を昨夜見たんです、』と旅人が言つた。

これはアンドリュウにとつて宛ら致命の一撃だつた、なぜなら彼の全疑惑が直ちにいよく堅くなるやうに思はれたからである。

『私は彼女を昨夜見たんです、』と若者は繰り返した、『だが自分の素性は敢て語らなかつたのです、私の目的はそこになかつたのですから。』

『ふむ、ぢや、』とアンドリュウが言つた、『君はやつぱり僕の言つたその詩人だつたね。』

『さうです、私にはそれを否定することもできませんし、又否定するつもりもありません。なるほど私は自分では迷兒になつたつもりでゐて、眞直に門へ來てゐたんですね、もしも、貴方の仰有るやうに、森の中にも信實があり山の中にも欺待があるとしたら。』

『無論、それはある、』とアンドリュウが言つた。『而かも我々ジブシイ間には世にもない嚴重な穩密があるのだ。君もそのつもりで僕に胸襟を開いてくれ給へ、すれば僕の言に何等の表裏もないといふことを悟るだらう。そのジブシイ娘は僕の親族の者なのだ、そして萬事僕の支配の下にあるのだ、もしも君がそれを妻に欲しいと言ふなら、僕自身は言ふに及ばず、親族中の者残らず二つ返事さ、よしまた情婦にと言つても、僕等は何の小六ヶ敷い異議も唱へない、もしも君に金さへあれば、何しろ貪慾といふ奴は我々のランチョオには何時も附屬物なんだからね。』

『金は持つてゐます、』と若者が答へた。『この上著ラヤズの帶布の中にです、それは私の身體に巻きつけてゐます、金貨で四百クラウンあるんです。』

これがアンドリュウには第二の致命的打撃だつた、彼はその旅人がそんなに澤山な金を身につけて持つてゐるのは、それを使つて愛してゐるものを入れようといふ目的にほかならないと思ひ込んだからである、彼は吃りく／＼答へた。『それだけあれば澤山だ、君はもう名乗つて出るばかりになつてゐる、それから仕事に取りかかることだ、あの娘だつて馬鹿ぢやないんだから、君のものとなればどんなに仕合せな身分になるかぐらゐるはよく知つてゐるのだ。』

『あゝ、友達、』と若者が叫んだ。『私は貴方に知つてもらひたいんです、私がかういふ變つた服装をして來たのは、貴方の言ふやうに、戀の力によつてでもなければ、また何等プレシオーサに意があつてでもありません、なぜならマドリッドにはその

秀麗極まるヒターナ同様に、いやそれよりもつと巧く、許多の心を咬し許多の魂を丸め込む術に通じた美人が澤山ありますからね。尤も實を言へば貴方の親族の美人はこれまで私の見た誰よりも勝れてゐるんですがね。私がこんな衣服を着て、徒歩で歩き、犬に咬まれるやうな事になつたのは、戀からではなく、この身の不運からなんです。』

この説明を聞いて、アンドリュウの情沈しきつた精神は再び揚り出した。風は、彼の豫測してゐたとは全然異つた方角からだといふことが明かになつたからである。努めてその混乱から逃れようと、彼は更に秘密を保證した、そこで若者は斯く言葉を續けた——『私はマドリッドで、或高貴な人の家にゐる者です、その人に私は主人として、ではなく親類の者として仕へてゐたんです。その人には嗣子の一人息子がありました、彼は親類關係といふところからも、また兩人が同じ歳でかつ同じ

氣性であるといふせいからも、私に大變親しく友愛をこめて接してくれてゐたんです。この若紳士が或貴顯な令嬢に戀しました、そしてもしも彼が、彼をもつと高貴な家族と縁組させたいと望んでゐた兩親の意志に義理堅く従はないのでしたら、彼はその女と大喜びで結婚してゐたのでせう。それかといつて彼は、私のほか萬人の眼をうまく晦迹して、斷えず好きなその婦人の許へこそ行く行つてゐたんです。或夜のことです、いや不運が特に、私の今貴方に陳べようとしてゐる冒険をさせよう爲この夜を選んだに違ひありません、私達はその婦人の家の側を通つてゐると、私達はその家の反對の側に一見、様子をした二人の男が立つてゐるのを認めました。私の縁者は彼等を偵察しようといはしました、然るに彼がその男達の方へ一歩踏み出すが早いか、彼等の劍は引抜かれ、彼等の楯は用意されました、そして彼等はぐんぐん私達に向かつて來たんです、そこで此方も同様の身構をし、同等の武器

でもつて彼等と戦ひました。戦ひはすぐ果てました、同じく相手二人の生命もです、私の縁者の嫉妬によつて、また私が彼を防禦しようとする熱心によつて十分に勵まされた二タ突きが、相手二人を爲留めたんです——途法もない事變で、滅多に見られる圖ではありません。かうして思はざる勝利を博した後で、私達は宅へ歸つて、持てるだけの金を持ち、密にサン・ヘロニーモのお寺へと立退きました、そして其處で翌朝その事件が発見された時にどんなことが出懸するか、またその殺人者に對する推測がどう下されるかといふことを知らうと待ち設けてゐました。

『私達はその現場に私達がゐたといふ何の痕跡も発見されなかつたといふことを聞知つたのです、そこで思慮深い坊さん達は、私達の不在から私達に何か嫌疑がかかること、なつてはいけないからと、私達に歸宅を勧めました。私達も既に彼等の勸告に従はうと心を決めてゐたんです、その矢先でした、裁判所のアルカルデ達がか

の若い婦人及び彼女の両親を召捕つてしまつた、そしてアルカルデ達が訊問したその家の召使のうちの一人、若い婦人の従者が、私の縁者の夜に日に彼女を訪れてゐたのを申立て、しまつたといふことが私達の耳にはいつたんです。この證據が上ると彼等は私達の捜索にかゝつたんです、そして役人達は私達を見付け出さないで、却つて私達の逃亡の形跡を澤山見付け出したんです、そこで全市を擧げて、その二人の騎士を殺した當人は私達であるといふことに意見が一致し確定したんです。遂々、親類の伯爵及び坊さん達の勧めによつて、そのお寺に二週間の間隠れてゐた後で、私の同類は一人の坊さんと一緒に、自分も坊さんの姿となつて、そこを發ちました、そして事件が如何におさまるかを見るまで、伊太利に渡りそこからフランダアズへ行かうと、途をアラゴンへ向かつたのです。私の方は、それと別々の行動をとつた方がいゝと思ひましたので、徒歩で、ちがつた方向へ、一人の坊さんと一緒

に、坊さんの俗の兄弟といふ服装で出發したんです。そしてその坊さんとはタラヴイラで別れました。其市ネコから私は獨りきりで旅をしました。そして途に迷ひ、遂に昨夜この森へ達したんです。其時私の非道い目に遇つたことは貴方も御承知です、なるほど私はラ・ペーニャ・ド・フランシアのことを尋ねましたが、それは私にかけられた質問に對する單なる方便の返事に過ぎなかつたんです、なぜなら私もそれがサラマンカのすつと向ふにあるといふことはよく知つてゐるんですから。』

『全くだ、』とアンドリュウが言葉が挟んだ、『それはこゝから約二十リーグも右手に當るのだ、だからもし君が其處へ行くとこゝろだつたら、君は立派に眞直な道をとつてゐたわけさね。』

『私のとらうとしたのはセヴィールへの道だつたです、其處で私は親類の伯爵の親友である、ゼノアの一紳士を探し出すつもりだつたんです、その人は平常ゼノアへ

向けて澤山な銀塊を輸出してゐるんです、で、私の計畫は、その人が私をきつとその運送人達と一緒に、その仲間の一人として遣つてくれるに違ひない、その手段でもつて私は安全にカルタヒーナに達し、そこから伊太利へ渡ることが出来るだらうといふのでした、といふのも近々二艘の撓走船ガッソイに銀の積込みをすること、なつてゐたからなんです。これが私の身上話ですよ、親友、これを戀を失くしたせいではない、純粹の不運の結果であると言つてゐる私が間違ひですか？　そこでもしもこゝにゐるヒターノ諸君が、假りにセヴィールへ行くものとして、私をその仲間に加へて其處まで連れて行つてくれるのでしたら、皆へのお禮は見事にするつもりです、それは皆と一緒にならずつと安全に旅行ができて、私を悩ます心配から幾らか逃れることができる筈だと信じるからです。』

『いや、彼等は君を連れて行くだらう、』とアンドリュウが言つた、『それとも若し



君が僕等の一隊と共に行くやうなことができなかったら——何しろ僕にはまだ皆がアングルシーヤへ行かうとしてゐるかどうか、判らないからね——君は兩三日うちに僕等と出會ふこと、なつてゐる別の隊と共に行つてもいいのだ、何、君がその身につけてゐる金のうちを幾らかやれば、彼等をもつと厄介な難事からでも、君を救ひ出すのだ、いや彼等は唯々としてそれをやるのだ。』さう言つて彼はその若者の傍を離れて、他のジブシイ達に、旅人の望むところ、及びその勞力に對しては、報酬をすると申出てゐることを報告した。

彼等は皆その客人を野營に留めておきたがつた、だがプレシオーサはそれに反對した、その上彼女のお祖母さんが言つた。自分はセヴィールはおろかその近邊へも行くことができない、それは嘗て彼女が、セヴィールでは人に知られた、トルキシ—ロオといふ帽子屋を欺かしたことがあるからといふのである。彼女はその男に絲

杉で作つた冠を頭に頂き、眞裸體になつて、水の一杯はいつた大桶に首まで沈め、さうしてぢつとして夜半までゐるやうに、そして夜半が來ればそこを出て、大きな寶を捜すやうにと説きつけた、その彼女が前々から彼に信じ込ませてあつた大きな寶といふのは彼の家のさむ場所に隠されてあるのだつた。さて人の好い帽子屋は朝祈禱の鐘を耳にすると、さあ時刻だと、大急ぎでもつて桶から身體を出さうとした、その結果桶は彼と一緒に倒れて彼の身體に傷だらけになつた、一方水でもつて床は大洪水となり、その中を彼は、溺れつゝあるといふことを大聲で喚きながら、一生懸命泳ぎだした。彼の妻や隣人達が燈火をもつて其處へ驅けつけて見ると彼は手や足でもつて勇ましくばちやくやくやつてゐた。『助けてくれ！ 助けてくれ！』と彼は叫んだ、『息が詰るところだ。』そして實際彼はそれに程遠からぬ有様だつた、餘りの恐怖が彼をさうした結果に陥れたのだつた。人々は彼を掴んでその命に關はる危難

から彼を救つた、や、正氣つくと彼は、人々にジブシイ女が彼に計畫たたくんだ偽瞞のこ  
とを物語つた、だが、さう言ひながらも彼は、隣人達の言には一切耳を貸さずに、  
教へられた場所に一丈の餘も深く穴を掘つた、そして彼がだん／＼家の土臺石の下  
まで坑道を掘り進めだした時に、もしも隣人の一人から力づくで制しられなかつた  
なら、彼は家屋全體を頭からぶつ破目となつてゐたゞらう。この話が全市にば  
つと擴がつた、その結果、街の小さい子供までが彼に指を差し、彼の耳元でジブシ  
イの詭計のことや彼の輕信かるはずみなことを喚き立てるやうになつたのである、老ヒターナ  
のセヴィールへ行きたくない氣持の説明として、彼女の口から物語られた話はこれ  
だつた。

ジブシイ達は、その若者が身のまはりに莫大な金を所持してゐるとアンドリュウ  
から聞き知つて、立所に彼の仲間入りを許諾し、彼の望みに任せて何時までも彼を

隠匿かくまひ守護してやらうと約束した、彼等は道を左手にとり、ラ・マンチャからマアシ  
ーア王國へはいることに決めた。若者は彼等に心から感謝した、そして即座に金貨  
百クランを皆の間に分配するやうにと與へた、こゝに於てジブシイ達は洗滌された  
柔皮なめしかはの如く柔順になつた。プレシオーサは、だが、ドン・サンチヨオー——實はこれが  
若者の名前だつた、しかしジブシイ達はそれをクレメントに變へたが——の加はつ  
た一隊の間に永くるるのを喜ばなかつた、アンドリュウの方もどちかと言へばその  
協定を苦にした、彼にはクレメントが極つまらぬ理由から最初の意向をひるがへし  
たやうに思はれたからである、だが後者は、恰も彼の思惑を讀んだかの如くに、自  
分はマアシーアへ喜んで行く、なぜなら其處はカアタヒーナへ近いから、そしても  
し豫期通りそこに擡走船ガリイが着いてゐたら、そこから易々と伊太利へ渡ることが出來  
るからと彼に語つた。結局、もつと彼の行動を監視し、彼の思想を細かく詮穿する

ために、彼をもつと自分の眼下に置かうと思つて、アンドリュウはクレメントを自分の同僚にしたいと言つた、後者はその友誼に富んだ申出を有難い愛寵として受納した。彼等は何時とも一緒だつた、そして兩人とも素晴しく金をつかつた、彼等の金貨は雨の如くに降つた、彼等は仲間の誰よりも、うまく駆け、高く飛び、舞踏をし、そして棒<sup>バグ</sup>を投じた、で、女達からは普通<sup>カミ</sup>外れに好かれ、男達からは最高の尊敬を拂はれるやうになつたのである。

## 八

エストラマヂユーラを後にして彼等はラ・マンチャにはいり、それから漸次マアシアの王国を歩きまはつた。さうして通過する村や町の至る所で、彼等は球投げ、撃剣、駆けっこ、高飛び、または棒<sup>バグ</sup>投げの仕合をした、すべてさうした精力や、熱

練や、また軽捷の試験では以前アンドリュウだけがさうであつたやうに、アンドリュウとクレメントは優者だつた。その旅行中といふもの、それは六週間に渡つてだが、クレメントはプレシオーサと二人きりで言葉を交はす機会を得ず、また得ようともしなかつた、遂に或日、彼女とアンドリュウとが共に話し合つてゐた時、二人はクレメントをその場へ呼びつけた、そしてプレシオーサが言つた。

『クレメント、妾は貴方が始めてこの野營へきた時から貴方をそれと知つたのです、そしてマドリッドで妾に下さつた詩のことを想ひ出しました、でも言葉はかけなくなつたのです、どういふつもりで貴方が妾達の中へ來たのか判りませんでしたからね。でもそのうちに貴方の不運をすつかり知ること、なると、妾は魂まで悲しみました、尤も同時にそれは妾にとつてほつと一安心でしたの、と申しますのも、この世にはジブシイとまでなつたドン・ジュアンといふ人間があるやうに、同じやり

方でもつてドン・サンチヨオといふ人間も姿を變へるやうなことになるまいものでもないと考えて、大變心を痛めてゐましたのですから。妾はこのことを貴方に打明けます、それはアンドリュウが、貴方にその身がどういふ素性のものであるか、また何の目的でジブシイになつたかといふことをもう知らしてあると申しますから、  
 「そしてそれは實際のことだつた、アンドリュウはクレメントと自分の思想に最も直接關係のある問題について話ができるやうにと、彼にありし顛末をすつかり明かしてあつたのだ、」『貴方は妾が貴方を知つてゐたといふことが貴方に何の益にもならなかつたと思つてはいけません、御覽の通り、妾があればこそ、そして妾が貴方のことを言つたおかげで、この人々は何の造作もなく貴方を仲間に加へたのです、かうなつたからには妾請合ひます、物事は貴方のお好み次第に運んで行くのですわ、そこでこの妾の好意には貴方もお禮を返して下さるでせうね、それはアンドリ

ユウにさうしたいやしい心になつたのを恥かしく思はさないやうにね、またこの人が今のこの生活での辛棒にどれほど缺けてゐるかといふことを傍から言はないやうにして頂きたいのです、それと申しますのも、この人の心が妾の心に囚へられてゐるとは想ひながら、それでもこの人が、假令ひ僅かなり、自分のしたことを悔いてゐるやうな様子をしてゐるのを見ると妾は何時も悲しい氣持になりますからね、

「いや、儂たぐひなきプレシオーサ、」とクレメントが答へた、『ドン・ジュアンがその身を私に明かすのに輕々しく振舞つたものと思つてはいけない。前以て彼を見露はしたのは私なのだ、最初彼の眼が私にその何を感じてゐるかを明かに物語つたのだ、そこで私の方からまづ彼にこの身の素性をうち明けた、そして君の言ふ如く彼の心がさうして君に囚へられてゐるといふことを嗅ぎつけたのだ、すると彼は、私を信頼するに足る人間と見込んで、その秘密を私に委ねたのだ。私が彼の決心及びその選

擇を稱揚したかどうかは彼にきいてみるがい、畢竟私はプレシオーサ、美が如何に全能なものであるかといふことぐらゐを解しないほど頭の鈍い者ではないからね、そして君の美は、それは愛らしさの全境界を突破したものであるが、すべての過失を辯護して餘りあるのだ、もし過失なるものが世にあるどうにも抵抗し難い原因をさして謂はれるものとすればね。君が私の身を思ふて言つてくれたことに對しては、私は有難く君に感謝してゐる、そして君がその當惑から幸福な結果を得ること、また君が君のものであるアンドリュウの愛情に浴し、アンドリュウの方も、兩親の同意を得て、彼のものであるプレシオーサのそれに浴することにしたいといふ心からの希望をもつて、君にお禮を返す積りでゐる。その結果素晴らしく美しいその一對から、自然が上機嫌でもつて拵へるやうな此上もない麗はしい子供がこの世に現はれること、なるのを希つてゐる。これが私の何時も望んでゐることなんだ、

プレシオーサ、そしてこれが私の何時もアンドリュウに言ふことで、彼のその當を得た愛情から彼を外向けさすやうなことは何も言ひはしないのだ。』

頗る情をこめてクレメントがこれらの言葉を口にしたので、アンドリュウはそれが單なる愛想に語られたものか、それとも愛情から出たものかといふ疑を抱いた、なぜなら嫉妬といふ兇惡な疫病は甚だ疑ひ深くつて太陽の光線に浮動する微塵にまで腹を立て、戀する者はその戀人にかゝはることなら何でも吾身を苦しめる材料としてしまふからである。とはいへ、彼は頑固な嫉妬を抑へつけた、なぜなら彼は自身の幸不幸よりもよりプレシオーサの善意に頼みをおいて、そしてそれを、すべて戀する者に通常ある如く、彼がその欲求するものをまだ得てゐない限り、不仕合せなこと、見做したからである。そして結局、お互の間の美しい理解が、クレメントの實直な心意氣と、アンドリュウに少しも嫉妬の餘裕を與へなかつたプレシオーサ

の禮節と慎重とによつて得られたので、アンドリュウとクレメントは同僚であり友人である關係を續けることゝなつた。

クレメントには詩人の倂があつた、アンドリュウには六絃琴が可なり弾けた、そして兩人共音楽好きだつた。或夜、それは野營がマアシアから四リーグ離れた或谷間に張られた時のことだつたが、アンドリュウは栓の木の根方に腰を下ろし、クレメントは彼に近く常緑の櫛の木蔭に座を占めた。彼等は各々六絃琴を手にしてゐた、そして夜の静けさに誘はれて、アンドリュウが婉轉歌デスカントを始めるとクレメントがそれに應答をつけて、彼等は交る／＼歌をうたつた。

アンドリュウ

空高く灯されたる一萬の金色燈、

そは この冷たき夜をして

眞晝の光と競はしむ。

仰けよ、クレメント、星燦爛たる彼方の大空を、

さらば汝はその影像に、

もしも想像の靈妙ならば、

かの愛らしく輝ける面を見ん、

其處を中心ミナタに美しき、はた優美なるすべては集つどふ。

## クレメント

其處を中心まなかに美しき、はた優美なるすべては集つどふ、  
而して其處にゆかしく和して

善と美は會ひ、

なほ清淨もその居を定めぬ。

さまで地に汚されぬ美しき者を、

世の天才の如何なる者かよく爲し得る？

そは言葉に靈妙の足らねば、

高く聳ゆる、類ひ稀れなる、はた鳴り響く詩歌にて讃稱するを。

## アンドリユウ

高く聳ゆる、類ひ稀れなる、はた鳴り響く詩歌にて讃稱すべきは

汝が名前、耀くヒターナ！

大地の驚き、はた歡喜、

いと高き圓天井のまだその上に輝くもの。

出来れば我は『名聲』より奪ひしならん悦びて、

喇叭や聲をば、そが喧しき稱讚は、

世人の耳を驚かし、

プレシオーサの名を第八天まで揚ぐるなる。

## クレメント

プレシオーサの名を第八天まで揚ぐることの、

もしも合ひかつ適するならば、正しく、

諸天は新たに喜悅を知るなるべし

その名の輝く宮廷中に響き渡れば。

而してそはこの地上に響き

世に喜びを弘める樂の音のこと。

強き魅力を息づきて

心に平和を、耳に狂喜を。

もし、それまで陰で聞いてゐたプレシオーサの聲が、その時彼等の歌に應じて響かなかつたなら、彼等は、恰も、せかず騒がず彼等の歌合戦を終局まで運ばして行く公民と奴隸のそれだつた。彼等は直ちに歌の進行をとゞめた、そしてぢつと呼吸を殺して彼女の歌に耳を傾けた。彼女の詩句はその場で生れたものか、それとも前々から作られてあつたものか、私は知らない、それは兎も角、彼女は次の歌を限りなく優美に、そして恰もそれらがその場合を目當てに作られてあつたかの如くに歌つた。

## さてこの戀の企てに

われも同じく戦ひ得れど、



とどまることの譽れなれ

淨き乙女に、輝き渡る眼を誇るより。

われらの足に踏みつけらるる、いとあはれなる草木も、

もしもそがとく健かに眞一文字に成長すれば

自然の、神の扶けによりて

そが頭をば彌高く天に向つてもたぐべし。

このわが低く貧しき身分にても、

乙女の榮譽に威を高められ、

正しき望みの遂げられざるなし、

世の財寶はわが羨みの數ならず。

われは如何なる悲しみも、あるは苦痛も見出さず

愛のはた尊敬の缺けたるに、

そはわれ自身形造れば、思ふに、

おほむねわが身の好運をば。

わがうちに横はるもの、みをわれ爲さん、

實直の道を踏むために、

然る後この頭上に来れかし

何なりと運命さだめの大空みそらを喜ばさんもの。

われはそれを悦ばん、もしも美に

さまで高き王権のあらば、そは、

わが心を異常に揚げ、

而してわれを彌高き道に据ゆるなる。

もしも魂にして人々の一様ならば、

この世の中のいと、賤しき奴僕なりとも

價値ある正直、高き徳にて

高位極まる者とも競ひ得るなり。

われとわが心のうちに感ずるものは

卑しきもの、すべてを超してわれを揚ぐ、

そは、必定、莊嚴及び愛の

卑俗のものに寄りかゝらねばこそ。

プレシオーサが彼女の歌をうたひ終ると、アンドリュウとクレメントは彼女に會はうと座を立つた。三人の間には會話がはづんだ、そしてプレシオーサは非常な智慧と深慮と銳利とを披瀝した、それゆゑ、クレメントの説によれば、アンドリュウの途法もない決斷、それを彼は前には彼の分別よりも寧ろ彼の若さのせいだと言つたが、その決斷は道理至極のことであつた。

その翌朝野營は疊まれた、そして彼等は、市から三リーグ離れた、マアシーアの

管轄区内の或場所に着いた、其處で或災難がアンドリュウの身に降りか、つた、そしてそれは今少しで彼の生命を犠牲にするところだつた。

## 九

彼等はその土地で、例によつて、銀の器物や飾物を抵當として保證を納めた後で、ブレシオーサと彼女のお祖母さん、クリステイナと他の二人のジブシイ娘、及びクレメント、アンドリュウは一軒の旅舎に宿をとつた。その旅舎は或金持の後家さんの手で經營されてゐた、そしてその後家さんには年頃十七八の、美麗なといふよりもお轉婆な一人の娘があつた。彼女の名前はジュアーナ・カアヂユウチャと言つた。この娘がジブシイ達の踊るのを見て、悪魔の仕業でアンドリュウに惚れ込んでしまつた、それはアンドリュウにそのことを打明けて、もし彼に彼女を娶る氣さへあれば、

親類中がどう言はうと、彼を良人にもたうと企んだ程の惚れ方だつた。

彼女は彼に言葉をかける機會を見つけてゐたが、それを家畜場の内で見出した、

アンドリュウは其處へ二頭の若い驢馬を捜しにはいつて來てゐたのだつた。

そこで彼女は大急ぎで彼に言つた。

「アンドリュウ(彼女は既に彼の名前を知つてゐた)妾、獨身でお金持ちよ。妾のお母さんには妾の外に子供はないのよ、この宿屋はお母さんのものよ、まだほかに、大きな葡萄園や、澤山の家があつてよ。妾、貴方が氣に入つたわ、だからもし貴方に妾を妻とする氣があるなら、さうと一言仰有いな。さあ早くお返事を、そしてもし貴方が賢い人間だつたら、今に見ていらつしやい、貴方にもきつとお互がどんな暮しをすることにゐるか判つてくるでせうから。」

カアヂユウチャの大膽なのにアンドリュウはしたか、面喰らつたが、それでも彼

は彼女の望む即決をもつて返答した。

『お娘さん、私はもう婚約してゐるのです、それに我々ヒターノはヒターノとのみ縁組みをすることになつてゐるのです。貴女の私に與へた下さらうといふ恩恵に對しては私は大變感謝いたしますが、私にはそれをうける資格がないのです。』

この嬉しからぬ返答に遭つてカアヂユウチャは死に陥ちることから二吋と離れなかつた。で、もしその時家畜場へはいつて來る四五人のヒターノを見なかつたならば彼女はそれに對してなほ辯護してゐたでもあらう。

彼女は復讐の念に燃え上つて、その場から驅け出した。アンドリュウは、賢い人の如く、そつと彼女から避けようと心を決めた、なぜなら彼は彼女の眼に、彼女が婚姻の桎梏でもつて進んでその身を彼にまかせようとしてゐるのを読み、彼はさうした戦闘で單獨に接戦するといふ目に遇ひたくなかつたからである。それゆゑ、彼

はその夜のうちに其處を立退いてくれと仲間を乞ふた。彼等は何時もある通り柔順しく彼の要求を容れて、直ちにそれにとりかゝつた、そしてその夜再び抵當物を支拂つて、陣地を引拂つた。

カアヂユウチャは、アンドリュウが彼女のまだ思ひきれないのに行つてしまふところだといふことを、またこの時を措いては自分の思ひを達することができないといふことを知ると、彼が心よくそれをすまいと思ふところから、力づくでもつて彼を引留めようと決心した。その邪惡な了見から想ひついて彼女は極めて器用にそつと、アンドリュウの行李の中へ——それが彼のものであると彼女は知つてゐたので——自分の宅にあつた高價な珊瑚の首飾りと、二個の銀メダルと、及びその他の小飾り物とを入れた。

さてジブシイ達がその旅舎を出るや否や、彼女は大聲に叫んで、ジブシイ達が彼

女のをものを掠めたと振れまはつた、そこで、裁判所の官吏が二人とその土地の多くの人々が彼女の周囲に集つて来た。

ジプシー達も歩を止めた、そして誰も彼もその家の持物は何一つ身につけてゐないと誓つて、皆の行李を吟味あまためてくれるやうにと申し出た。

それはジプシー婆さんを、こちらから申込んだその吟味が、彼女の大事にかけて藏つてある、プレシオーサの小飾り物や、アンドリュウの衣類の發見にまで及びはしないかと、一方ならず心配させた。

だが蓮葉娘のカアヂウチャはその頭に載つた婆さんの心配を素早く片付けてくれた、それは人々がまだ二つの行李を顛倒ひっくりかへさないうちに、彼等に言つたからである。

『一體どの包みがあの大變踊りの巧いジプシーの持物だか訊いて下さい。妾はあの人が二回私の室へはいつてくるのを見たわ、泥棒はきつとあの人のよ。』

アンドリュウには彼女が自分を指して言つてゐるのだとわかつた、で、笑ひながら答へた、『お娘さん、それが私の包みです、そしてあれが私の驢馬です。もしもその包みの中か或はあの驢馬の上かに貴女の失つたものがありましたなら、私は貴女にその七倍の價を仕拂ひませう、勿論法律が窃盜に對して與へる刑罪をうけた上にです。』

裁判所の官吏が直ちに驢馬に附けた荷物を下した。そして手もなく盗まれた家財を發見した、それを見るとアンドリュウはハツと驚きどきまぎして、恰も石像の如くに突立つた。

『それ、妾の疑ひは外れなかつたわ、』とカアヂウチャが言つた、『この悪黨は何といふ美しい顔でもつてその根性を隠してゐるでせうね。』

アルカルデは、彼もそこへ來合せてゐるが、アンドリュウ及び他のジプシー達を

世にありふれの盗人路賊と呼んで、罵りはじめた。アンドリュウは一言も發しないで、途方にくれてじつと突立つてゐた、カアヂユウチャの奸詐には流石の彼も思ひ及ばなかつたのである。

遂々、アルカルデの甥になる、一人の傲慢な軍人が、ツカノと彼の傍に歩み寄つて、言つた。

『諸君、このきたない泥棒ジブシイをよく見給へ！ 此奴はきつと、その手のうちに品物が見出されてゐても、泥棒をしたんぢやないと言張つて、正直者のやうな面を構へようといふ男なんだよ。この悪黨にふさはしいのは、あちこちを踊り歩いたり、野から山へ泥棒をし廻つたりするかはりに、陛下にお勤めを果すといふことなんだ。軍人の手前、僕は此奴を一撃でもつて足下に仆したく思つてゐるんだ。』

さう言ひながら、彼はいきなり片手をふり上げた、そしてアンドリュウにその失

神から彼を飛び上らせ、彼に自分がアンドリュウ・カバリーロオではなく、ドン・ジュアンであり一個の紳士であるといふことを想ひ出さした程の一撃を加へた。そこで彼は、勃然と怒りを發して、その軍人に飛びかゝるなり、彼の帯びてゐた劍を鞘から引抜いて、それを彼の身體に突刺した、そしてその男を死骸として足下に横はらした。

人々は叫び喚いた、死んだ男の叔父であるアルカルデは、狂氣の如くに怒つた、プレシオーサは氣を失つた、そこでアンドリュウは、その身の防禦には氣をかけたないで、彼女を救ふことばかり考へた。

運悪く、クレメントは、その場になるなかつた、荷物を持つてもう先へ行つてしまつてゐたのである。アンドリュウは大勢の人々に襲はれた、そして遂に人々は彼を押へつけ、重い鎖でもつて彼を縛り上げた。アルカルデは、ならばその場で彼を絞罪

に處したかつた、だが彼は市の司法権の下にあつたので、止むを得ず彼をマアシアまで送らなければならなかつた。そして、彼が其處へ連れて行かれたのはその翌日だつた。

その間にアンドリュウはアルカルデをはじめその土地のあらゆる人々からあらゆる罵しられ辱しめられた。なほ、アルカルデは彼の手で捉へられるだけの他のジブシイ達をすつかり逮捕した、しかし多くの者は、発見されて捉まへられることのないやうな用心をしてゐたクレメントの仲間と一緒に既に逃亡してゐたのだつた。

翌朝になると、アルカルデは、部下の官吏や他の大多数の軍人達を従へて、逮捕したジブシイの一隊と一緒にマアシアへはいつて行つた、その一隊の中にはブレシオーサも可哀相なアンドリュウもゐた、アンドリュウは驢馬の背に縛され、手枷をされ、顎の下には熊手が箝められてあつた。マアシアの市民達は皆その囚人を認

ようと群がつて來た、軍人の殺されたといふ報知が既に傳はつてゐたからである。だがブレシオーサの美が素晴らしいものだったので、讚美することなしに彼女を眺めた者はその日誰一人としてなかつた。

彼女の可愛らしいことが市長夫人の耳に達した。市長夫人は彼女を見たいといふ好奇心に驅られて、他のジブシイ達がすべてぶち込まれた牢獄へ彼女を入れてはいけないといふ命令を發するやうにと良人を説きつけた。

アンドリュウは或暗い狭苦しい獄舎に投げ込まれた、太陽の光と一緒に、ブレシオーサの存在が發散した光を奪はれて、彼は恰もそれがもう永久に得られないやうな氣がした。

ブレシオーサと彼女のお祖母さんは市長夫人の許へ連れてこられた、夫人はブレシオーサを一目見るなり、『ほんとに皆が褒めるのも尤もだ、』と叫んで、彼女を優し

く抱きしめ、彼女の顔を何時までも飽かずにしけくと瞞つた。夫人は婆さんに少女の歳を尋ねた。

『十五でござります、今一ト月か二ヶ月で、やツとまあ。』それが答だつた。

『あのコンスタンテアが居たらその年頃だつたらうに、』と夫人が言つた。『あ、お前方！ この若い娘の悌が妾の心にあれを失くした悲しみをどんなに新しく想ひ起さすだらう。』

こゝに於て、プレシオーサは市長夫人の両手をとつて、それに繰返し／＼接吻しそれを涙で洗つて、言つた。『妾の奥方様、獄舎に繋がれてをりまするヒターノに過失はございません、あの人は怒つたからでござります。皆はあの人を泥棒と呼びました、けれどもあの人は泥棒でも何でもござりません、皆はあの人の顔に一撃を加へました、あの人の顔は貴女様がそのうちにあの人の魂の善良であるといふことをお

讀みなさることができませんやうなそんな顔でござりますのに。お願いでござります、奥方様、どうぞあの人を裁判にかけて下さるやうに、そして市長様にあの人をあんまり早く法律上の刑罰でお仕置きなさらないやうにお取りなし下さいませ。もしも妾の美しさが幾らかなりと貴女様のお心を喜ばせますのでしたら、どうぞそれをあの囚人の生命をお保護かほごひすることでお保護かほごひ下さいませ、その生命と一緒に妾の生命も果てるのでござりますから。あの人は妾の良人となる人でござります、もつとも今までは正當なそして適當な故障が二人の一所になるのを妨けてゐたのでござります。もしもあの人の放免がお金の力で得られるものでございましたら、妾共の仲間の持物はみんな競賣されてもよろしうござります、そして妾共はお求めなさるよりもつと多くのお金でも喜んで差上げます。妾の奥方様、もしも貴女様が愛のどんなものであるかを御存じでございましたら、また貴女様の旦那様に對してそれを



御感じなされたことが、いや今猶ほ御感じでございましたなら、妾の良人を情深く眞心こめて愛してゐる妾に不憫をおかけ下さいませ。』

ブレシオーサがかく語るその間彼女は始終市長夫人の両手を堅く握りしめ、涙に満ちたその眼を夫人の顔から少しも放さずに見据えてゐた、夫人の方もそれに劣らぬ熱心をもつて彼女を瞞めて、そしてさうしながら夫人は泣いた。

丁度その時市長がはいつて来た、そして彼の妻とブレシオーサとがさうして涙を交はしてゐるのを見て、彼はその光景に、それと等しくそのジブシイ娘の美しいことに大變驚いた。彼女の愁嘆をどうした理由かと彼が尋ねると、ブレシオーサは夫人の手を放して、市長の足下に身を投げて、泣き叫んだ。

『お慈悲でございます、お慈悲でございます、旦那様！ もしも妾の良人が死にますれば、妾も死にます。あの人に罪はございません、もしございましたら、その罰を妾にお課して下さいませ、それも出来ませんやうでしたら、せめてあの人を助ける手段が見つかりますそれまで、御裁判の御猶豫をお許し下さいませ、それはあの人が悪心から罪を犯したのではございませんので、神様がそのお恵み深い心からあの人にきつと御救助を送つて下さるのでございませうから。』

市長はジブシイ娘の口から發しられたさうした言語を聞いて益々驚いた。でも、もし彼に弱身を見せたくないといふ心がなかつたら、彼も彼女と共に泣いてゐただらう。

かうしたことが起きてゐた傍で、老ヒターナは心中でしきりに澤山のことをひつくり返してゐた、そしてすつかりその熟考をしてしまふと、彼女は言つた、『恐れ入りますが、少々お待ちを願ひます。手前がかうしたお嘆きをお喜びに變じてお目にかけますから、尤もそれは手前の生命にか、はることでござりますが。』

そして彼女はいそ／＼とその室から歩み出た。彼女が歸つて来るまで、プレシオーサは涙と懇願をとゞめなかつた、さうして彼等に彼女の約婚をした理由を顧みてもらひたがつた、内心アンドリュウの父に来てもらつて事をうまく計つてもらふために彼に使者をやらうと決心したからである。

## +

ジブシイ婆さんが小さい箱を小脇に抱へて歸つて来た、そして秘かに傳へなければならぬ重大事件があるからと言つて、市長と夫人に自分を伴ふて別室へ退いてくれと乞ふた。市長は婆さんがかの囚人のために前以て彼の恩恵を乞はうため、何かジブシイ達が働いた窃盜罪について彼へ報知でもしようとしてゐるのだと想像して、直ちに彼女及び夫人を伴ふて彼の私室に引退つた、其處へ來ると、ジブシイ婆

さんは、兩人の前に跪いて、斯う言ひ出した。

『もしも今御前様方に差し上げなければならぬこの目出度い御報知に、手前の犯しました大罪を赦して下さるやうな價値がござりませんでしたら、手前はこゝで相當の御處罰を頂くつもりでござります。さりながら手前がこの身の懺悔をいたしまする前に、まづ御前様方にはこの小飾り物を御存じでござりますが、どうか仰有つて下さりませ。』

さう言つて婆さんは市長の手にさうしたプレシオーサの品物の納められた箱を渡した。市長はそれを開けてその子供らしい玩具類を見た、けれどもそれが何を意味してゐるかといふことは少しもわからなかつた。市長夫人も亦、良人と同じやうに何の氣もなくそれらを眺めた、そしてそれらが單に何處かの小さい子供の飾り物であるただけ口出しゝた。

『仰せの通りでございます、』とジプシイが答へた、「だがこれが何處のお子様のものであるかといふことはこの折疊んだ紙に書いてあるのでございます。』

市長は急いでその紙を開いた、そして次の如く読み下した――

『此小兒の姓名はドーニヤ・コンスタンザ・ド・アセヴェドオまたド・メネシースにして、母親はドーニヤ・ギオマア・ド・メネシース、父親は、カラトラエヴの騎士、ドン・フアランドオ・ド・アセヴェドオなりき。彼女は一千五百九十五年の耶蘇昇天節の當日、朝の八時に姿を隠しぬ。小兒は此函中に納められたる小飾り物を身に佩びたりき。』

その書附の内容を聞くや、忽ち、市長夫人はその小飾り物を認知した、彼女はそれを唇に押しつけて、何遍も何遍もそれに接吻した、そして氣を失つた、そこで市長は彼の娘のことを尋ぬるよりもまづ夫人の介抱にすつかり氣をとられた。

『善良な婦人、ヒターナではなく天使、』と正氣に復へると夫人が叫んだ、「この玩具の持主は何處にゐます?』

『何處にと仰有るのでございますか、奥様?』といふ返事だつた。「貴女様のこのお宅にゐるのでございますよ。それ貴女様のお眼から涙を搾つたあの若いジプシイ、あれがその持主でございます、そして確かに貴女様のお生みなされたお娘御なのでございます。そのお娘御をマドリッドでこの書附に記されたその日のその時刻に手前が御宅から盗み出しました。』

これを聞くと、激動した夫人は邪魔物を押しのけて、兩手を擴げて以前の室に駆け込んで行つた。と、そこにはプレシオーサが女中達や召使達にとりまかれて、やはり泣き悲しんでゐるのだつた。一言も發せず、夫人は彼女を引抱へた、そして彼女の左の胸の下部に彼女がそれをもつて生れて來た所の小さい白ちやけた黒子が

あるかどうかと驗べた、そして彼女はそこに、時によつて形を大きくされたそれを見出した。その後で、同様に手早く、彼女は娘の片方の短靴を脱ぎとつて、磨かれた大理石のやうに滑かな、雪のやうに白い足を露はした、すると彼女の捜すものをそこに發見した、右の足の小さい二つの指が薄い膜でもつて膠着してゐたからである、それは彼女の幼い時分情深い両親が外科醫に斷らす事のできなかつたものである。胸の黒子、足、小飾り物、誘拐された日附、ヒターナの懺悔、そして彼女の両親が最初彼女を見た時に感じた喜悅と感動、それらのものはブレシオーサが紛ひもなく彼女の生んだ娘であるといふことを、市長夫人の魂の中で眞實の聲でもつて確證した。そこで夫人はその腕に彼女をしかとだき抱へて、市長とジブシー婆さんのゐる室へと歸つて來た。ブレシオーサは、どうしたわけですうした検査がなされたかその理由がわからなかつたので、<sup>オモツク</sup>困惑した。その上夫人が彼女を腕に抱き上げて、彼女に

一度ならず、百遍の接吻をした時には猶更のこと驚いた。

とうとうギオマア夫人の貴重な重荷を携へて良人の面前に現はれた、そしてその乙女を彼女の腕から良人は腕に移しながら、『さあ、旦那様、貴方の娘のコンスタンザをお受け取り下さい、』と言つた、『貴方の娘がこの子であるといふことはもう疑ふ餘地がございません、妾は足にも胸にも記號を見ましたから。いえ、さうした證據よりもつと確かなのは妾がこの子を一目見た時からつとこの心の中で叫んでゐましたその聲なのでございます。』

『それは私も疑はない、』とブレシオーサを腕に抱きながら、市長が言つた、『いや同様の心持が、お前の胸を通つたやうに、私の胸をも通つたのだ。だがさうまで何も彼も奇妙に一致するなんて全く奇蹟によつてといふほかないね。』

その家の人々は今や茫然自失した、そして彼方へ行つたり此方へ行つたりしてお

互に尋ね合つた、「一體これは如何したといふんですね？」だが彼等の推測はひどく間違つてゐた、けだしジブシイ娘が御主人のお娘御であると誰が思ひ浮べよう？市長は夫人と娘とジブシイ婆さんに、彼がこの事件を他言していゝと考へるまでそれを秘密にしておかなければならないと命じた。

さてジブシイ婆さんには、彼は、彼の寶を盗んだことから彼に與へた害悪は赦してやると言つて安堵を與へた、それを返した事によつて彼女はより以上の償ひをしたからといふのだつた。たゞ一つ彼を悲しませたのは、プレシオーサの性質を知るにつけ、彼女が自分を一ジブシイと、なほ悪いことには、泥棒であり且殺人者である人間と約婚してゐるといふことだつた。

「あ、貴方様、」とプレシオーサが言つた、「あの人はジブシイでもなければ、泥棒でもございません、尤も人殺しはいたしましたけれど、でもその時あの人の名譽を

傷つけたのは相手でしたの、そこであの人は自分が何者であるかといふことを見せやるのに、その男を殺すほか仕方ありませんでしたの。』

「おや！ 其人はジブシイでないとお言ひかね、お前？」とギオマア夫人が言つた。「しかとさやうでござります、」と老ヒターナが言つた、婆さんはアンドリュウ・カバリーロオの物語を陳べた、即ち彼がサンチアゴの騎士、ドン・フランシスコオ・ド・キヤルカアモオの息子であるといふこと、彼の名前はドン・ジュアン・ド・キヤルカアモオで、父親と同じ階級にあるといふこと、及び彼女は彼がその衣類をジブシイのそれと取代へた今もその前の衣類を保存してあるといふことを言つた。

同じく彼女はドン・ジュアンとプレシオーサとが二年間お互に試験をした上でなければ結婚はしないことに腹を合はしてゐるといふことをも陳べた、そして兩人の立派な行爲、及びドン・ジュアンのよく似合つてゐる境遇も有體に發表した。

兩親はそれを聞いて彼等の娘を見出した時と同様にいたく驚いた。市長はそのヒターナにドン・ジュアンの衣類をとり遣つた、そこで婆さんはそれを携へてゐた一人のジブシイを伴ふて歸つて來た。婆さんの歸るに先立つて、プレシオーサの兩親は彼女に向かつて無數の質問をした、彼女は大變慎み深く優雅に返答した、それゆゑ彼等は假令彼女を自分達の子供と認めなかつたとしても、彼女を愛してゐるに違ひないと思つた。

彼女がドン・ジュアンに對して愛情をもつてゐるかどうかといふ彼等の問ひに答へて、彼女は、自分のためにジブシイとまで身を墮した人間に對する感謝の義務からといふ以上には愛してゐない、しかしそれとて、彼女の兩親の望むところ以外には出るべきでないと思つてゐると言つた。

『よく判つたよ、プレシオーサ、』の彼女の父が言つた。『わしはお前が一度失はれて

復つてきた紀念としてこのプレシオーサなる名前をお前にとつておきたいのだからね、お前の父として、わしはお前をお前の生れに傷のつかないやうな身分に仕立てるつもりだから、そのことはわしに任しておいてくれ。』

プレシオーサは溜息を吐いた、彼女の母はその吐息がドン・ジュアンに對する愛によつて吹き込まれたものだとしてすぐ感付いたので、市長に言つた。

『ドン・ジュアンがさうした階級の人間でありますし、娘にそれほどまで思ひを寄せてゐますからには、貴方、この娘をその人にやつても別に悪いことではなからうと、妾存じますの。』

『この娘は今日やつと見付かつたばかりぢやないか、』と市長が答へた、『それをもつてお前は手放す氣かね？ まあちよつとの間でもいゝからこの娘と一緒に暮さうぢやないか、いやこの娘が嫁入して御覽、もう私達のものぢやなくなつて良人のもものと

なるんだよ。』

『ほんとにさうでございますのね、』と夫人が言った、『それにしてもドン・ジュアンを連れ出すやうにお命じ下さいまし、多分今頃は穢い獄舎に横はつてゐることですから。』

『それに違ひありませんわ、』とブンシオーサが言った、『泥棒であり殺人者であり、殊にジプシイですもの、皆はあの人に、宿をあてがふ筈はありませんわ、』

『よし一つ訪ねてやらう、』と市長が言った、『恰も彼の懺悔を聞きに行くといった風にね。では、兎も角、繰り返して言つておくが、この出来事は私がそれを他言してもいゝと言ふまで誰にも知らしちやいけないよ、さうした方が私の職務に便利だから。』

さう言つてブレシオーサを抱いておいて、彼はドンジュアンの閉ぢこめられてゐ

る牢獄差して行つた、そして従者は一人も連れないうで、彼の監房にはいつて行つた。見ると囚人は兩足とも脚鎖で繋がれ、手枷を箴められ、鐵の熊手もまだそのまゝ、彼の顎の下にあつた。監房は暗かつた、僅に幽かな日の光が、壁の頂上に近い銃眼銃眼から差し込んでゐるばかりだつた。

『どうやつてゐるね？ お氣の毒な悪徒、』とそこへ這入りながら、市長が言った。

『ならばわしは西班牙中のジプシイ共をすつかり念珠繋ぎにして、其奴等を一氣に片付けたく思つてゐるのだ、ネロが一撃でもつて全羅馬市民の首を刎ねたいと思つたやうにな。おい名譽の點では恐ろしく氣の早いでふ、泥棒どん、わしはこの市の市長だよ、そこでお前の約婚者いひなづけといふのはお前達の仲間と一緒にこゝにゐるジプシイ娘であるかどうかお前に訊きに來たんだ。』

それを聞くとアンドリュウは市長がきつとブレシオーサに惚れ込んだのだと想像

した、なぜなら嫉妬といふものは微妙な物で、他人の身體を破りも裂きもしないでそこへはいつて行くからである。とは言へ、彼は答へた、『もし彼女が私と約婚の仲だと言つたのでしたら、それは全く眞實です。だが、よし彼女が私と約婚の仲ではないと言つたとしても、彼女は同じく眞實を語つてゐるのです。なぜなら、ブレシオーサが嘘をつくといふことはあり得ないことですから。』

『するとあの娘はそんなに正直者かね?』と市長が言つた。『さうだとすれば、しかもそれがジブシイ女であるといふからには中々大したものだ。いや、何、あの娘はお前の約婚者だと言つたよ、だがまだその手はお前に與へてゐないとは言つたがね。あの娘は犯した罪のためにお前は死ぬものだと思つてゐるのだ、そこでわしに向かつてお前が死ぬる前に結婚さしてくれと泣きついて來たのだ、さうしてあの娘はお前のやうな途方もない大泥棒の未亡人になるといふ名譽を得たいといふのだ。』

『それでは、彼女の望み通りを貴方のお手でして頂きたいのです、』とアンドリュウが言つた。『さうして彼女と結婚できれば、私は彼女のものであるといふ名目の下にこの世を去り、喜んであの世へ赴くでせうから。』

『お前はひどくあの娘を愛してゐる譯だね?』

『それはもう、』と囚人が答へた、『如何なる言をもつてしても逆もその眞相を語り得ない程にです。兎に角、市長さん、事を手早く片付けて下さい。私は私を侮辱した男を殺したのです。私はその若いヒターナを愛慕してゐます。もしも私の死が彼女の面目を傷けないのでしたら、私は喜んで死にませう、すれば私達はきつと神の恵みに不足なく浴することになるでせう、なぜなら私達は兩人共お互に交はした約束を立派にきちんと守つたのですから。』

『ぢや今夜迎ひを寄越さう、』と市長が言つた、『お前はブレシオーサとわしの家で結



婚するのだ、そして明日の朝となればお前は斷頭臺に上るのだ。かうすればわしは法官の要求にもお前達兩人の希望にも應じたわけになるのだ。』

アンドリュウは市長に禮を陳べた、市長は宅に歸つた、そして彼とアンドリュウとの間に起きたことを夫人に物語つた。

市長の留守の間にプレシオーサは彼女のこれまでの生活をすつかり母親に述べたのだつた。如何に彼女は自分を一ジブシイであり婆さんの孫娘であるとはばかり思ひ込んでゐたことか、だが、同時に彼女は何時も自分を一ヒターナであるよりもすつと以上の者に評價してゐたといふのだつた。

彼女の母親は、彼女が眞實ドン・ジュアンのことを思つてゐるか？ ほんとのことと言ふやうにと彼女に命じた。彼女は如何にも羞し氣に眼を落して答へた。それは、自分をジブシイだと考へてゐたので、そしてサンチアゴの騎士と、殊にドン・ジュ

アン・ド・キヤルカアモオのやうな地位のある者と縁組をしたら自分の境遇がもつと善くならうと思つて、猶その上、附合つてみると彼の善い性質や立派な振舞がよくわかつたので、時折彼に愛情の眼を捧げたこともあつたといふのであつた、だが先刻もきつぱり言つたやうに、彼女には兩親を喜ばすこと以外に何をする意向もないといふのだつた。

夜がやつて來た。かれこれ十時といふ頃に人々はアンドリュウを牢獄から連れ出した、手枷と足械とは取除けられたが、彼の身體を頭から足まで縛つた太い鎖はそのまゝだつた。

かういつた風で彼は、彼を運ぶ者のほか誰にも姿を見られずに、市長の家に到着し、無言のうちに用心深く一室へ通された、そして其處へたゞ一人残された。

と、間もなく一人の懺悔僧がはいつてきて、彼に懺悔を命じた、その翌日彼は死

なねばならないからである。

『懺悔は大喜びでもつてする所ですが、』とアンドリュウが答へた、『どうした譯で先づ私に結婚させないのです？ だがよし私が結婚することゝなつても、あゝ、私を待つものは悲しい婚禮の室なのだ。』

それをすつかり聞き込んだギオマア夫人は、良人に向かつて、彼がドン・ジュアンに蒙らしつゝある恐怖は過多であると言つた、そしてそのせいで彼は生命までも失ふかも知れないと氣遣つて、良人にその恐怖を幾らか弛めてやるやうにと乞ふた。市長もそれに同意した。そこで懺悔僧を呼び出して、まづジブシイをプレシオーサと結婚さすやうに、さうすれば囚人も潔く懺悔をし、望みが最も乾干び萎れた瞬間に屢々慈悲を雨降らす所の、神に向かつて心のあらん限り自己を推薦するであらうからと言つた。

アンドリュウは一室に移された、そこにはギオマア夫人、市長、プレシオーサ及び二人の召使のほか誰もゐなかつた。だがプレシオーサはドン・ジュアンの鎖で縛られ、その面にはまるで血の氣が失せ、そしてその眼は新しい涙でもつて曇つてゐるのを見て、彼女の心が彼女の内部に沈んだ、そして身體を支へるために母親の腕にしがみついた。

『しつかりしさない、お前、』と彼女に接吻しながら、市長夫人が言つた、『かうしたことはみんな今にお前を喜ばしたり嬉しがらしたりすることに變るからね。』

どういふことが目算まれてゐるか少しも知らなかつたので、プレシオーサはその悲しみを慰めることができなかつた、ジブシイ婆さんも全く氣が氣でなかつた、そして傍らの人々はどうなることかと手に汗を握つてその結果を待つてゐた。

『副牧師さん、』と市長が言つた、『このヒターノとヒターナは貴方に結婚さして頂く

者ですがね。』

『それは私には出来ません、』と僧侶が答へた、『かうした儀式はやはりそれに必要な形式を踏んだ上のござりますからな。バンズ(教會に於ける結婚舉行の公告)は何處で公布されました? 婚禮を許可した、僧院長さんの免状は何處にあります?』

『その點は私の手落ちです、』と市長が言つた、『だが免状は僧正代理の手から得るつもりです。』

『ではそれが参りますまで、私は御免を蒙りませう。』さう言つて僧侶はほかに何も言はずに、人の誘りを避るため、まごついてゐる人々をそのまゝにして、さつさとその家を立去つた。

『坊さんのやり方は至極尤もだ、』と市長が言つた、『そしてそれは神の攝理によつてなされたものかも知れない、アンドリュウの處刑を延期さすためにね、つまりブレ

シオーサと結婚すれば彼はもう間逃れないのだからね。だが、まづバンズが報告されなければならぬ、かうして時が得られるのだ、そして時といふ奴は最悪の難事からでも幸福な結果を屢々引き出すものだ。そこでわしはアンドリュウの意見を聞きたい、それはもしも事情が一變して、何の不安も擾亂もなしに、彼がプレシオーサの良人となるとすれば、彼は自分を、アンドリュウ・カバリーロオとするか、或はドン・ジュアン・ド・キャルカアモオとするか、どつちにした方が幸福な人間だと考へてゐるだらうといふことだ。』

ドン・ジュアンは自分が本名で呼ばれたのを耳にするや否や、言つた『プレシオーサが沈黙を守らうとしなかつた上は、そして私の素性が貴方にわかつたからには、私はきつぱり申上げます、假令ひ私は運が向いてきて世界の長カサにならうとも、彼女は依然として私の望む唯一の目的目的です、また神のそれを除いては、その他の如何な

る恵みにも私は心向けないつもりです。』

『いや君がその立派な精神を披瀝してくれたからには、ドン・ジュアン・ド・キャルカアモオ君、私は時機さへくればプレシオーサを君の正妻にして上げよう、だがさし當りそれを見越して彼女を、吾家の吾生命のなほ吾魂の最も貴重な寶石として君に授けよう、それはドーニャ・コンスタンザ・ド・アセヴエド・メネシス、即ち私の一人娘として君に授けるのだ。故に、もし彼女が愛の點で君と同等であるとしたら、生れに於ても決して君に劣つてゐはしないのだ。』

アンドリュウは吃驚りして啞然となつた、そこでギオマア夫人が簡単に、娘を失つたこと、そして取り返したこと、及びジブシイ婆さんが誘拐したといふ疑ふべからざる證據のことを陳べた。猶一層驚いて、しかし無量の喜びに充されて、ドン・ジュアンは養父母に抱きつき、彼等をお父さんお母さんと呼んで、プレシオーサの手

に接吻した、そして彼女の涙は彼の涙であつた。

秘密は最早保たれなかつた。その場に居合はせた召使達によつて報知が四方へ擴がつた、それが殺された男の叔父であるアルカルデの耳に達した。そして法律の馳行は連も市長の聲に蒙らすことが出来なかつたので、彼はをのづと復讐の望みがすつかりその途を斷たれたと知つた。

ドン・ジュアンは婆さんが藏つてあつた旅行服を身につけた、彼の禁錮と鐵の鎖は自由と黄金の鎖に變じた、そして幽閉されてゐたジブシイ達の悲しみは、喜悅と變つた、彼等はその翌日皆放免されたからである。

死んだ男の叔父は起訴を止して、ドン・ジュアンを赦すといふ約束で二千デユカツトをうけとつた。ドン・ジュアンは同僚のクレメントを忘れなかつたので、直ちに彼を捜しにやつた、だが彼は見つからなかつた、のみか四日経つまで彼については何